教職大学院 Newsletter No.152

福井大学大学院　福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2021.10.27（公開版）

魅力化に向けた学校改革　3人の院生の軌跡より

福井県立丸岡高等学校校長　島田　芳秀

福井県では、中教審答申の「令和の日本型学校教育の構築を目指して」にそって、県立学校普通科の魅力化、特色化が進められている。本校でも４年前から学校の魅力化に取り組んでおり、2022 年度入学生からは、普通科普通コースに代わり普通科みらい共創コースとスポーツ探究コースが新設される。魅力化の推進役となったのは、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースで学んだ（学んでいる）３人の先生方である。３人の先生方の歩みを紹介しながら、魅力化に向けた学校改革の舞台裏について述べていきたい。

～魅力化の始まり～

私が管理職として赴任した４年前は、定員割れが続き学校再編も地域で噂される状況であった。学校の魅力化を進める上で大切なのは授業改善であるが、当時は、研究授業や研究会も不調であり、教員の授業力向上が喫緊の課題であった。

その中で 2018 年度から、今澤泰秀教諭が学校改革マネジメントコースで学ぶことになり、先生方に強制しないゆるい勉強会「授業力向上勉強会（通称 JKB）」を校内に立ち上げた。さらに、連合教職大学院の先生方の指導を受けながら「問いの研究」や「評価方法の研究」をすすめ、授業研究会の開催や教員向けの授業力向上通信（JKB 通信）を発行していく。徐々にではあるが、先生方の中で授業を改善する楽しさが芽生え、JKB に参加する人数も増えていった。今澤教諭こそ本校の First penguin であり、魅力化の基礎を築いた功績は大きい。

2019 年度からは、転勤された今澤教諭の後を受けて、西岡晃未教諭が学校改革マネジメントコースで学ぶことになる。西岡教諭の院生時代（2019 年度・2020 年度）が、本校の大きな転換期となる。

～逆風の中で～

本校の強みは、地域のイベントに積極的に参加するなど、地域とのつながりが深いことである。地域とのつながりを深め、国際社会に対応できる人材を育成するため、グローカル教育を学校の教育目標とした。そして、活動資金を得るため管理職主導で、文科省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」の申請をすることとした。

内容

巻頭言 (1)
スタッフ自己紹介 (3)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより (7)
インターンシップ/金曜カンファレンス報告 (13)
夏期集中講座報告 (18)
ラウンドテーブル 2021SummerSessions 振り返り (33)

しかし、文科省の研究指定を受けることによる多忙化などを理由に、職員会議では教員の 2/3 以上が研究指定の申請に反対した。申請することすら許されない雰囲気の苦しい時期であった。逆風の中でも連合教職大学院の先生方が親身になって申請のアドバイスをしてくださり、コンソーシアムを組む地元坂井市役所の協力もあって、北陸三県で唯一の「グローカル型」の研究指定校に決まった。

教員からの賛同が少ない管理職主導の研究指定を、教員を巻き込み、やる気にさせ、学校の魅力化に繋げていくにはどうしたらよいか。西岡教諭が院生となったのは、このような課題を抱える時期であった。

～試行錯誤の院生１年目　覚悟を決めた２年目～

西岡教諭の院生１年目は、学校の研究体制の構築が課題であった。教員を８つのチームに編成し、各責任者の下で研究開発を行っていったが、特定の教員だけが頑張っていて、その他の教員が傍観者になりチームとして機能していなかった。西岡教諭から「改革を進めていくのは孤独ですね」と悩みをうちあけられたりもした。

当時は管理職がトップダウンで魅力化を進め、イベント中心の結果だけにとらわれた活動であった。管理職と先生方の間に挟まれ、西岡教諭は組織の中での自分の立ち位置に苦しんでいたと思う。そんな中、2019 年の教職大学院の集中講義で「実践コミュニティーの計画と実践」を学んだ西岡教諭は、学校内で地道に研究活動を一緒に行っていくコアメンバーを増やし、メンバーを連れての他校の実践の視察や授業研究会の企画を積極的に行うようになった。「まずは自分が行動する」と覚悟を決めたようであった。

2020 年度の院生２年目は、コアメンバー集めに奮闘していた。異動してきた野尻友佳子教頭も仲間に加わり、総勢８名のメンバーが毎週１回集まって授業改善や学校の魅力化について活動することになる。西岡教諭は、教員をやる気にさせるにはどうしたらよいか、メンバーの意見をよく聞きながら教員研修会の改善に取り組んでいた。

文科省の研究指定事業も、西岡教諭が顧問を務める部活動の「地域協働部」を中心に活発な活動が始まっていった。学校設定科目「グローカルスタディー英語」・「グローカルスタディー社会」や「総合的な探究の時間」を通して、全校生徒、教員がグローカル事業に携わるようになった。「高校魅力化評価システム」による生徒のアンケートでも、生徒の主体性・社会性・自己肯定感・発表力・社会参画意識の数値が他校を大きく上回るようになり、生徒の変容が教員のやる気を引き出していった。

私の学校経営方針も「３つのＣ」（Connect 多様な人とつながる、Chance 多様な経験、Catch 可能性をつかむ）とし、教員自身が、地域や企業、大学や行政など多様な人とつながり、多様な経験を通して、可能性をつかむという、管理職主導から教員主導に転換していった。

～学校が変わってきた～

2021 年度からは、西岡教諭の後を受けて、鈴木千文教諭が学校改革マネジメントコースで学んでいる。研究推進のリーダーとして、コロナ禍で生徒の活動が制限されるなか、地域や企業との探究学習や海外の姉妹校とのオンライン学習など、様々な学びに取り組んでいる。鈴木教諭の取り組みは、2022 年度から本校で新設される普通科みらい共創コース、スポーツ探究コースの基礎となっている。

また、４月からは 1 年間の長期インターンシップとして、教員を目指す 3 人の院生（藤本紗奈さん、立石虎太郎さん、東哲平さん）も本校で学んでいる。現役の教諭と学生の合計４名の院生が校内で活動する、アカデミックな学校に変わってきている。

思えば、４年前までは「福井大学のラウンドテーブルって何？」という本校が、今では、教員だけではなく、生徒達もラウンドテーブルに積極的に参加するようになった。２０年以上も書かれていなかった研究紀要も復活し、教員がテーマを持って執筆している。

今は、私がトップダウンで何かを指示するのではなく、院生の鈴木教諭や中堅教諭を中心としたミド

ルアップダウンの学校経営が行われている。私の仕事は、経営に必要な「人・もの・金・情報・時間」をどこから調達してくるかと学校の魅力をいかに中学生や地域に伝えるかに特化している。

これからも、福井大学連合教職大学院との連携を学校経営の柱とし、教員の指導力向上と高校の魅力化をさらに進めていきたい。そして、本校で育った教員集団が、近い将来、福井県の教育の牽引役となっていること願っている。

参考資料

今澤泰秀　『学校改革実践研究報告 NO400』2020 年
西岡晃未　『学校改革実践研究報告 NO447』2021 年

スタッフ　自己紹介

福井大学連合教職大学院 コーディネートリサーチャー　**高田　準一郎**

こんにちは。髙田（たかた）です。今年度から連合教職大学院のコーディネートリサーチャーとして参加します。本務校（岐阜聖徳学園大学教育学部羽島キャンパス）では、社会科教育（中等教科教育法、初等社会）を担当しています。

こちらの岐阜に着任して以来、地域の地形や風景を観察し、そこから歴史を探究するフィールドワークを実施しています（授業では地域観察とよんでいます）。たとえば、普段は気にも留めないような景色のなかにも、竹林や石垣など、歴史を紐解く鍵が隠されています。鬱蒼とした竹林は、洪水の勢いを抑制し集落を守るために、丸い石を重ねた石垣は、増水から民家や水屋（土蔵）を守るために、といった人々と水との闘いの歴史がみえてきます。キャンパスの南には、境川が流れ、欄干のない橋（沈下橋）がかかっています。沈下橋といえば、四国の四万十川が本場ですが、こちらは超ミニですので、プチ沈下橋と命名しました。

沼沢が広がっていた低湿地帯のなかにキャンパスがある、と体感的に気づかせてくれるのは、田植えの季節です。まわりがほとんど田んぼなので、水を張った田んぼからキャンパスをみると、「まるで湖水のなかに立つリゾートホテルだね⁈」と錯覚させてくれます。（とくに黄昏時にはより幻想的になり、この光景は職業柄「『大学案内』に使える⁈」とか思ったりします。でもキャンパスのまわりには、喫茶店一つ見あたりません）。田植えの季節には、沼沢が広がる低湿地帯（地理用語では後背湿地）だった、という場所の記憶が可視化されるのです。可視化といえば、かつて京都の南にあった守護神、朱雀の巨椋池が宇治川の洪水（「昭和 28 年災害」））で復活したことがあります。

地域観察の授業（専門演習や教職実践演習）では、キャンパス周辺を歩いて、観察で得られた地形の様子や、土地利用の知見などを断面図に描き込んで、場所性を表現した地図をつくっています。この地域観察では、このような地図のことを断面マップとよぶことにしました。ポイントは、平面マップではなく断面マップだという点です。断面マップは意外に描けません。断面マップなのに、道路や河川の部分が平面になってしまうのです。これは、平面図は二次元的な認知による描画が可能であるのに対して、断面図は三次元的な認知による描画である可能性が高いことが考えられます。

そこで、断面マップのスキル開発では、無地の用紙に四本の補助線を引き、フレーム化を図ってみました。四本の補助線により、三つの層ができます。これらの三つの層に自然堤防や後背湿地、土手（輪中堤）を対応させ、微地形を描くためのテンプレート（型板、型紙）として機能させるのです。これで一気に、完成度の高い断面マップが描けるようになりました。この断面マップを使って、輪中堤の決壊を想定し、自然堤防と後背湿地の広がる氾濫原の意味を考えると、結果的に防災的視点から地域を考えることにつながっていきます。

振り返ってみると、学生時代は、日本の各地を自転車で走破し、地域の表情をスケッチに描きとめ、院生の時には、弥生期の遺跡発掘調査や、環境設計事務所の景観基礎調査などに従事しました。スケッチの技法が大いに役立ってくれました。公立高等学校で教えていた頃は、建設省（当時）関係の「中国・地域づくり交流会（歴史を生かした地域づくり部会）」に参画し、地域づくりの考え方を授業の内容にも生かしたりしました。今ではすっかり一般道路でおなじみの「道の駅」は、隣の部会⁉から生まれたアイデアだったこともメモリアルの一つです。その後、広島大学附属中・高等学校で地理を担当し、広島大学や広島修道大学で非常勤講師を務めました。

いずれの時期も、地域と関わっていたことに改めて気づかされます。今年度、連合教職大学院のゼミ生さんは、６月、本務校の附属小学校での授業で、四年生の社会科「住みよいくらしをつくる（単元名）」をとりあげました。水の問題を扱うなかで教材研究として、浄水場の水はどこからきているのかを一緒に調べてみました。岐阜といえば、清流の長良川がよく知られています。長良川から直接ではなく、長良川の伏流水からとっていることに気がついたのです。この伏流水に着目して、どのような授業をつくっていくのか。子どもたちの学びを深める授業開発力につながっていければと思っています。どうぞ、よろしくお願いいたします。感謝いたします。これからもよろしくお願いいたします。

福井大学連合教職大学院 コーディネートリサーチャー　小栗　和雄

今年度から、福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職大学院に参加させていただく、岐阜聖徳学園大学の小栗と申します。専門分野は、スポーツ科学、特に運動生理学と発育発達学であり、小児期の肥満・メタボリックシンドローム、腸内細菌と運動習慣、ジュニアアスリートの発掘・育成をキーワードとして研究を進めています。また、本務校では教育学部体育専修に所属し、生理学や運動生理学という科目を担当しながら、保健体育教師の養成に当たっています。

保健体育の教師を育成する上で、私は学生たちが保健体育の現場で活用できるスポーツ科学を学び、科学的根拠に基づいた授業を展開できるよう努めています。突然ですが、１円硬貨の直径は何センチでしょうか？電子マネー化が進んでいるとはいえ、よく見ている１円硬貨ですから正確に答えられそうです。しかし、いざ答えようとすると、1cm だったような…と迷ってしまうのではないでしょうか。正解は…是非、実際に測ってみてください。このように、普段よく見ているものでも正確に答えようとするとなかなか難いものです。この質問の意図は、１円硬

貨と子どもの能力や練習効果が類似していることにあります。保健体育教師は、様々な運動種目の指導を長年経験し、子どもを日々観察しているため、様々な練習の効果や子どもの運動能力を正しく把握しているように思えます。しかし、経験的な手法や主観的な観察だけでは期待通りの練習効果が現れなかったり、子どもの運動能力を過小（大）に評価してしまうことがあります。そこで、保健体育教師は、スポーツ科学の知見や客観的な測定を活用し、科学的根拠に基づいた保健体育の授業を展開する必要があるのです。

科学的根拠に基づく授業は、子どもたちに納得感と必要感を与え、積極性を引き出すことができます。例えば、中学校の体育では必ず持久走を行いますが、中学生は激しく長く走ることに嫌悪感を示し、積極的に取り組むことができません。そこで、持久力の高さは確実に将来の長寿や健康につながること、中学生期は身長と共に心肺容量が激増して持久力も激増する人生唯一の時期であること、休みながらマイペースで走っても持久力はある程度向上することを中学生に伝えたいものです。こうした科学的根拠を知ることで、中学生は持久走に対する納得感と必要感を覚え、積極的に取り組むことができ、引いては人生合計のランニング距離が延びていくことが期待されます。

また、科学的根拠を活用するためには、科学の常識が覆される可能性があることを承知し、常に学び続けることが不可欠です。近年、スポーツ科学の常識が次々に覆されています。スポーツ中に水分を飲んではいけないことはもちろん否定されていますし、乳酸は疲労物質として悪者扱いされてきましたが、現在では心臓や筋肉のエネルギー源になることがわかっています。また、ウォーミングアップで行われてきた静的ストレッチングは、怪我を予防する効果が不明であるだけなく、筋力や瞬発力を低下させることがわかっています。この他にも、野球の投手が下半身を強化するために長時間のペース走を行うこと、捻挫などの怪我をした後に 3 日間ほど断続的にアイシングすることも否定されつつあります。「学ぶことをやめたら、教えることをやめなければならない」との格言の通り、科学的根拠を活用するためには、最新のスポーツ科学を学び続ける必要があるのです。

以上のように、科学的根拠の重要性を説いてきましたが、勿論、これだけで良質な保健体育の授業を行うことはできません。「教師の経験（episode）」と「児童・生徒の希望（hope）」は不可欠であり、これらに「最善の科学的根拠（evidence）」を塩梅よく加えながら保健体育の授業を展開することが肝要であると考えています。この教職大学院でもこうした理念をもって微力を尽くしたいと思います。そして、「最高傑作の授業はどれですか？」と聞かれ時、「次回の授業です」と答えてくれるような自己成長力のある教師を養成していきたいと思います。

福井大学連合教職大学院 コーディネートリサーチャー　加納　幹雄

■１　はじめに　ー私は珍しい種類に分類されるかもー

この４月からスタッフの一員の加納と申します。本教職大学院にかかわる方々に対する自己紹介の記事とのことで依頼されました。広範囲な読者を想定していますので、どのようなトーンがよいか悩みますが、一番は、やはり、院生の皆さんにインパクトがあるかどうかでしょうね。では、職歴ごとに一言メッセージを添えます。

■２　高等学校英語教員として

高等学校の英語の教員に採用されました。

今でも、この時代を振り返ることがよくあります。もっと「鍛えることができた」のに、ぼんやりしていたなあ、ということです。教える濃さが足りなかった。教える技術も遅れていた。教える内容も狭かった。何から何まで足りなかった。未熟だった。当時の教え子には定年退職を迎える者も出てきた。彼らのことを思うと決まってそう思います。もっともそのときは、最善で最上の教育を施していると思っていたのです。残念無念です。

■３　岐阜県教育委員会事務局に勤めて

学校と行政には大きな違いがありました。

古い時代の事務局でしたので、今とは大きく違うかも知れません。朝は、７時前に職場に行き、夜中に帰りました。世界が違うと思ったのは、上司から言われたことです。「自分が仕事をしたいならお金（予算）を獲得しなさい。」もっと教育をよくしたい気持ちがあるなら、新規に事業を企画し財政課から費用を獲得しなさい、ということです。予算で仕事がなされていく。頑張れば、新たな仕事ができる。逆もあり。

■４　地方自治体から国の教育行政に

日本の教育行政の仕組みを理解することができました。

どのようにして国が意思決定をするのだろうか、という疑問の答を垣間みることができました。例えば学習指導要領はどのような意思決定手順でできあがってくるのかがわかりました。特に文部科学大臣が諮問し、関係審議会等が答申する、という仕組みには感心するばかりでした。なるほど、こうして考えが集約していくのか、です。そんな中でも省内の職員のプライドを持った練り上げの仕事ぶりには、学ぶことがとても多くありました。

■５　大学の教員という仕事では

大学の教員の仕事は、「理念を語る仕事」かと思っています。本当に教える者のあるべき姿を学生に伝えることが仕事だと思います。そんなことはできません。ではなくて、本当なら先生は、こうするよね、こうあるべきだよね、と徹底して語るところ。

■６　終わりに

教員・教育委員会・文部科学省・校長職・国立・私立大学教員など勤めました。

いろいろと勤めてきて、いろいろな学生の問いかけに経験（事実）が語れることはとても安心できています。でも、一番語りたいことは、大学のチューターの先生の研究室にお邪魔したときに、「おお！よく来た。まあ座れ。うまいぞ。」と勧めてくださった、どちらの量が多いか分からなかったブランデー入りの紅茶の味と、先生の笑顔。古きよき大学。

ミドルリーダー/マネジメントコースだより

2 度目の豪雨災害

ミドルリーダー養成コース 2 年/長野県岡谷市立川岸小学校　久保田　美千代

令和 3 年度 2 学期始業式は 8 月 19 日（木）の予定だった。しかし、実際に始業式を迎えられたのは週明けの 23 日（月）となった。お盆の大雨で、本校区内で 3 名の方が犠牲になる土石流が発生したからである。そんな 2 学期のスタートから 1 カ月以上が過ぎた。学校生活は日常に戻っているように感じる。しかし、今回の災害に関わる私の取り組みはこれからである。豪雨災害に関わるこれまでの実践と今回の状況、これからの展望を書き留めておきたい。

私が，生まれ育った岡谷市内で豪雨災害を経験したのは今回で 2 度目である。前回は平成 18 年 7 月 19 日。講師として 2 校目の学校に勤務していた時。朝，出勤準備をしているとテレビ画面が突然変わった。「岡谷市で土石流」と画面から伝えられるが，理解できなかった。そのまま準備をして車に乗り込む。通勤路を進むが道路が浸水しており進めない。迂回ルートで出会った警備中の男性に「（諏訪湖の対岸にある）田中小学校に行きたいんですけど」と伝えると「もう水門を超えられねえよ。船でも出さなきゃ。」と言われた。市内で 8 名が無くなった豪雨災害であった。8 名の犠牲者のうち 7 名は私の地元地区，1 名は現在の勤務地，川岸地区の方であった。当時の勤務先も避難所となり，避難所開設準備や避難民の受け入れ等の支援をした。この避難所で 10 年ぶりに同級生に出会った。夏休みにはボランティアで土砂撤去を行った。割り当てられた住宅は小中学校の同級生の自宅だった。

災害翌年，新規採用となり他郡で数校の勤務を経て地元岡谷市に戻った。現在の勤務校，川岸小学校である。赴任当時，学校として平成 18 年豪雨災害に関わる学習を行っていないことに違和感を覚えた。2 年目。5 年生理科「流れる水のはたらき」で平成 18 年豪雨災害を扱った時，ある子が「先生，俺この次の日に生まれた。」と伝えてくれた。鳥肌がたった。同時に，来年度以降の子は，この災害を知らない世代であることに気づかされた。「何とか伝えたい」ただただそう思った。

翌年から平成 18 年豪雨災害学習を 5 年生の学習に位置付けた。理科の学習内容と絡め，外部講師の方を招いて当時を知る機会とした。市危機管理室から災害写真パネルや記録 DVD を借り，地区の方に当時の状況を話していただいた。学習日は，災害が起こった 7 月 19 日付近に設定した。合羽を着て災害が起こった現場へ，災害が起こったその日に見学に行った年もあった。

今年度，再び川岸地区で土石流災害が発生した。8 月 15 日朝，既に市内メールで豪雨関連情報が何通も送られており，私は，テレビやスマートフォンで情報を集めていた。そんな時，テレビの速報画面に「岡谷市川岸で土石流発生　3 名心肺停止」と映った。テレビ，スマホが手放せなくなった。10 時前に学校職員メールで学校長より「本校児童との確認はできていない」と伝えられた。夕方のニュースで「3 名死亡」と知る。それ以降この 3 名が帰省中の家族であったことや年齢，名前等が報道されていった。

今回の豪雨災害を受け，私が感じたことは無力感だった。15 年前の豪雨災害を教材に授業を仕組んできた。しかし，自分がこれまでに仕組んだこの学習がどれほど子どもの心に残っていたのか。卒業生から今年度の 5 年生まで，300 名強の子どもと 15 年前の災害学習をしてきた。災害後に同僚の先生から「うちは久保田先生と災害の学習してるから大丈夫だと思ったよ。」と言っていただいた。でも，私自身はこの言葉を素直に受け入れられなかった。「あの学習をしてきたんだから，避難したはずだ。」「家族に逃げようと伝えたはずだ。」とは思えなかった。その理由は私が一番よく分かっている。あの学習で，子どもが本気で思考した場面が無かったのだ。学びと現在の生活を結びつけることもできなかった。私が目指しているはずの「子ども主体の授業」とかけ離れた，ただ聞くだけの学習，独りよがりの授業だった。2 度の豪雨災害から学ぶことは多い。それをどう教材とし子ども主体の授業をつくっていくのか。今年度の 5 年生と共に進める「流れる水のはたらき」の学習場面はこれからである。災害を目の当たりにした子どもの心に寄り添いながら，学習を進める場面が迫っている。これまでの自分の甘さや思い上がりと向き合う単元である。

気持ちよく働ける職場にするために

学校改革マネジメントコース１年/あわら市細呂木小学校　森下　文恵

教職大学院入学と同時に教頭として採用され、現在の学校に着任いたしました。職種も学校も行政区も違う中で、どのような取組が大学院での学びにつなげていけるかを常に考える日々でした。校長、教頭、教務が変わる人事だったので、何かを変えるならチャンスでもありました。そこで、これまでの経験を基に、いろいろなことを校長に提案し、変更したりなくしたりすることから始めました。

まず、チョークで毎月書いていた行事黒板をやめて、紙を印刷して掲示することにしました。次に、職員会議をペーパーレスにし、会議の場所も職員室に変えました。パソコンを持たない用務員や支援員には印刷して対応してもらいました。事務職員が会議に参加することができるようになり、用務員も時間外で勤務することがなくなりました。次に、日々の連絡を書き込む「日報」を印刷して綴ることをやめました。また、家庭・地域・学校協議会では、夏休みに守って欲しい「提言」を作成し、確認表を提出し集計していましたが、職員の負担が大きいと考え、協議会として学校に関ることを考えていただくことにしました。感染症が落ち着いたら、どんどん学校に来ていただこうと考えています。職員が気持ちよく仕事ができるようにするためにいろいろと考えましたが、それが本当に良いものであったかどうか、不安を感じることもあります。

４月の合同カンファレンスで、『働きがいのある職場』を考えようと言われました。また、管理職は相手に伝わるように「語る力」が必要で、「聞く力」をもっと持たないといけないと言われました。さらに、受けとめてくれる包容力、安心感のある人で、「人間力」があることが大切と言われました。そのときは、簡単だと思っていましたが、一番大切な職員とのコミュニケーションをとることが、一番できていないような気がします。校長は、職員の様子を常に気にかけ、校長室から出ていろいろな先生に声をかけていらっしゃいます。特に、１人職の養護教諭と用務員さんに声をかけるようにしていると伺いました。日々の気配りこそが、職員室の会話作りの一歩だと思います。

また、小さい規模の学校なので１人にかかる業務が多くなります。そのため、例えば運動会の役割は、例年同じ役割を同じ人がしています。引き継ぎの必要もなく、慣れているので失敗することもないからでしょう。しかし、このように個人の力量に頼って

仕事をしていくと、教員同士が話し合う時間が少なくなります。また、異動してしまった人の仕事を誰も知らないことが起きています。だから、時間は限られていて大変ですが、みんなで話し合って決めていくようにしたいと思っています。教頭として、校長を見習いまず自分からみんなに話を聞いて歩こうと思います。

夏季集中講座で、附属中学校の「専門職として学び合う教師たち」や「学習する組織」を読みました。その中で、コミュニティの大切さ、何でも話ができる雰囲気を作ること、協働、一体感をもつなどが書かれていました。私は、「子どもをより良くしよう」という目標に向かって職員同士がコミュニケーションをするようになって欲しいと思っています。しかし、私がみんなに考えて欲しいと思うだけでは、「学習する組織」に書かれていたように、形だけの学習を組織に強いることになっていました。「話合いができる教員集団をつくりたい」と思うのであれば、そのことを常に提案してき、問題意識が持てるようにしたいと思っています。

本校では、特別支援学級での教員の異動があり、児童の対応にも苦労していました。５月に「支援の必要なお子さんとの対応」という内容の講演があり講師の先生から、ありのままを受け入れる、個性として考える、注意を引くだけの行動は無視するなどの具体的な対応について話を伺うことができました。専門的な話を聞くことで、もやもやした不安がとれ、安心して支援を行えるようになったと言っていました。困っていることに対して、専門機関とつながり、的確なアドバイスを受けるという心の支援も大切なのだと感じました。

管理職として「教師集団をどのように支援していくか」を考えていますが、みなさんの話を聞いて困っているところに支援ができるようにしたいと思います。独りよがりにならず、いろいろな機関に相談していこうと思います。人を変える前に、まず自分から変わるように努力しようと思います。

失くせない記憶も傘のように　鞄の中で明日へ向かう

学校改革マネジメントコース2年/東京大学教育学部附属中等教育学校　大井　和彦

今年度の東京は緊急事態宣言が発令されていない状態で始まるかに思えたが、すぐに“まん防”に入り、結局続けて宣言が出された。その後 9 月末までほぼ宣言下での日常生活となった。ここまでの予測はできてはいなかったが、昨年度の学校生活そして生徒の様々な活動制限を踏まえて、今年度は生徒指導主事としてどのように立ち振る舞うかを常に考えてきた。その中で想いと学びとの交錯が多くあったように感じている。

緊急事態宣言下での生徒の特別活動（殊に生徒会活動や行事運営・部活動等）は、感染防止という名の下に大きな制約を昨年度から強いられてきた。見えぬ敵とどのように向き合っていくべきか分からぬ中で無理もなかった話であり、生徒保護者のみならず教員も自らの生活や家族を考えた時に不安を覚えない訳はなかった。しかしながら一方で、生徒の精神的不安定によると思われる様々な事象が顕在化しているように思われた。これは、東京近辺の国立大附属学校副校長会でも話題になったとのことで、エヴィデンスは明確には示せないながらもこの状況下による影響であることは想像に難くなかった。

教室における身体的実存の相互実感の保障とともに、精神的実存の実感を生徒の中に伴わせることができるか。しかし、全てを手放しにしてコロナ禍以前の活動形態に戻すことはできない。この課題の納得解への方策として、中等教育段階だからこそ活動保障のために生徒自らがまさに“主体的”に動くことで、大人からの信頼を獲得していく過程を経ることが、今後18歳成人となるための主権者教育の意味からも一つの道と考えた。

まずは、5 月の体育祭。コロナ禍の始まり以降で、全校が一堂に校庭に会する初めての機会（この時は“まん防”期間下））において、どのように生徒がお互いに感染リスク対策の徹底を行いながら、充実した行事としての実施達成ができるか。実行委員会幹部団と 6 学年縦割りの応援団長三名とに私は以上の想いを伝えた。彼らは、召集や応援時における密回避と消毒の徹底等を如何に行うかを考え実行した。そして、9 月の銀杏祭（文化祭）。文化系部活動の主な発表の場でもあるが、緊急事態宣言下でどのようにそのために活動を維持していくことができるかを考え、運動部も含めた各部活動団体で、活動形態に応じた感染リスク対策のためのガイドラインを設定しそれを生徒会が集約した上で、活動を許可する方向へ職員会議での審議を依頼し、可決された。又一方で、文化祭は学校全体が会場になるため、それぞれの活動場所でどのように同様の徹底を行うかが体育祭とは別の課題であった。彼らなりに考えた最たるものは、最も感染リスクの高まる時間帯となる昼食時の使用場所限定だった。PC によるバーコード利用で、昼食を摂りに来た生徒の入室管理を行った。教員が影ながらの支援に立ちながらであるが、生徒達なりに万が一のことが起こったら文化祭は開けないという危機意識の下、懸命に事を進めていた。それでも、やはり生徒なりの思考・試行の中には大人の信頼を得るには足りない面も多々あった。

この各行事の企画に当たって我々生活指導部が行ってきたことは、生徒幹部への支援とともに職員会議において教職員からの理解を得るように動くことであった。その中で、個人的に改めて学びのあったことは、生徒指導主事という役職として己が周囲から見られていることの自覚を促されたことであった。組織として考えてみればそれは当然のことであるのだが、教員であることの自覚以上にその実感を己に伴わせることができていなかったと痛感した。

現在の朝ドラ主題歌の歌詞に「失くせない記憶は傘のように　鞄の中で出番を待つ」という楽句がある。これら行事の経験は、生徒にとっても私にとっても「（忘れられていくかもしれないけれど）失くならない記憶」として「鞄の中」にしまわれていくのかもしれない。本校に限らずどの教育機関も特に例年以上の思考・試行を重ねて授業・行事を行っているが、果たしてこの中で得た経験（≠体験）は、今後「傘」のような出番があるのか。それはどのような出番か。メルロ＝ポンティは、〈考えたこと〉の影にある〈考えないでしまったこと〉へ目を向けることを論じているが、今後の課題はまさに思考・試行しながらも目を向けられず無かったことになっていること、もしくは目を向けることができてこなかったことにどのように目を向ける姿勢を持つかであるだろう。

今年度のこれからは、私自身が役職を退いた後を見据えて、生徒会の自治と教員の組織における意識の持続可能性をどのように確立していくことができるかを模索することになる。教職大学院の先生方には、引き続きのご指導を賜りたくお願い申し上げたい。

学び続ける「私」となるために
―教師としてのこれからの歩み―

ミドルリーダー養成コース１年/奈良女子大学附属幼稚園　**鎌内　菜穂**

教職大学院に入学して早くも半年近くの月日が流れようとしている。『保育』の専門性を自分の言葉で語りたい、これまで何をどのように得てきたかを自らの実践から言語化し、園の研修機能の強化に寄与したいなど多くの期待を胸に、“私に何ができるのか”を模索する日々を過ごしてきた。しかし、自

分にできることが何かということは一向に見えず、「何かできるような私なのか」という問いに常に戻り、息苦しさを感じることもある。

実践においても同じく、今年度私が担任をしている 5 歳児の学級では、4 月から行き詰まりの連続だった。困り感を抱えている子ども、学級に居心地の良さを感じていない子ども、そんな子ども達との生活においては、私が得てきていたはずの『保育』は全く通用しなかった。そんな私が半年ぶりに「保育をした」という感覚に胸を躍らせたのは、2 学期がスタートしてすぐの日だった。コロナの影響で、2 学期は分散登園でのスタートとなった。学級を半数に分け、二日交替で登園してもらう。少しでも密を避けるのと、園での安全な過ごし方を丁寧に指導していく時間を保障するためだ。学級を A グループと B グループに分けた。A グループとの二日間を過ごし B グループを迎えた日に、「保育をした」と全身で感じた。本当に久しぶりの感覚だった。しかし同時に「保育をする」という感覚は何か、自らに問わずにはいられなくなったのは言うまでもない。なぜ、A グループでの営みを「保育」と感じられなかったのか、なぜ今年度の学級において「保育をしている」実感がもちにくかったのか。私の「保育観」を問う機会が思いがけず舞い込んだ。

２つのグループの大きな違いは、子どもと私の間に対話があったかどうかだった。教師である私の投げかけから子どもが思いをつないだり、子どもの思いから私も思いを広げたりしながら、やりとりを重ねて生活や遊びを創ろうとしていった。どちらのグループに対しても“同じように”私は関わっていた。この“同じように”というところが、私の「保育」の幅の狭さをはっきりと示していることに気が付いた。子どもを見てどうするか一緒に考えているつもりが、私の中でどうしたいかというストーリーができているから、それにフィットする時にしか対話を生み出すことができなかった。

思い返せば、私はこの学級に対して、常に「課題」を解決していくべきだと捉えていた。実際、6 月頃の園内研修での対話の音声を聞き返してみると、驚くほど「課題」という言葉を使って学級の子どもの姿を語っている。無自覚な自分の語りの中に何回も「課題」という言葉が出てくる。それだけで息がつまりそうだ。「課題」があるから子どもが力を発揮しないと思い込み、対話をする心もちが私になかったのだろう。

全員登園に移行し、全員が集まると多くの相互作用がうまれる。こちらの予想を遥かに超える出来事が次から次へと起こる。しかし、私は少しだけ肩の荷を下ろしたような気持ちでいる。とんでもないことが起こるのも、この学級らしさだと言える。一人一人の子どもの姿の変化が、「育ち」として見える。それがこの学級と向き合う原動力になっている。「課題」ではなく「育ち」に目を向けることが、子どもと共に日々を歩むことなのだろう。「子どもに寄り添う」というありきたりな言葉の意味がようやく私は得られたのかもしれない。『保育をする』ことは、自分の中だけのストーリーで創られてはならない。子どもと「私」にとって、互いに心地の良い関係の結び方を見出し、ここにしかない関係性の中で全身をつかって対話をしながら共に創り出していくものなのだ。

先日、学級の活動で初めてリレーに取り組んだ。活動後の振り返りで S 児が手をあげ、このように話した。「僕は走るのが苦手や。だから今日もやっぱり遅かったと思う」と。その言葉に学級の子ども達は口々に「そんなことない！」「早かった！」と励まし始めた。S 児を気遣ってのことだ。しかし S 児の表情が明るくなることはなかった。S 児は決して、そのような励ましが欲しいのではないとすぐに分かった。「それで S 君はどう思うの？」と私が問いかけると、「でも最後までがんばった」とはっきりと言った。清々しい表情だったことに、私は涙がこぼれそうだった。今の自分が見えてくるということは、時に辛さを感じることかもしれない。でも、そこで自分自身が納得できたということに意味がある。納得するから、次に自分がすべきことが見えてくるのだろう。

私も S 児のように清々しく言えるだろうか。清々しくいたいと思う。だからこそ、私にしか築けない関係性の中で、子どもと、同僚と、仲間と、対話を重ねていける「私」でいたいと思う。その時に自らが感じ、考えることを、その時の「私」にしか紡げない言葉で語りたい。そのことが新たな問いを生み、次への道しるべを示してくれるに違いない。それが「私」にとって学び続けるということになると今は感じている。

協働における「対話」の重要性

学校改革マネジメントコース２年/福井市国見中学校　吉田　清子

令和３年度の春は、大学院履修２年目の始まりであると同時に、大学院拠点校からの異動による、勤務校や職種・立場が変化しての始まりでもあった。これまでの取組をどう引き継ぎ、或いはどう変換し昇華させることができるのか。まずは、人間関係の構築から…と、不安と期待が入り混じったスタートであった。

新任地の福井市国見中学校は、福井市西部の沿岸部にある生徒数２０名、教職員数１０名の小規模校である。管理職として赴任し、まず、学校や組織の強みや課題を整理してみた。この SWOT 分析は後に、全体研究会で教職員全体でも行ったのだが、小規模校、へき地地域ならではの課題は、全教職員も同様のものであった。また、強みと弱みは表裏一体化したものであり、課題をどう強みに変換させ、強みをより伸ばすことができるのかを、取り組むべき実践としている。毎月の合同カンファレンスで取組を語り、グループメンバーの皆さんや先生方から指摘や示唆をいただき、職場へ持ち帰ってさらに職員と対話を図る。加えて、夏の集中 Cycle での学びで、実践の方向性について後押しいただいた感があり、日々の学びに一層の深まりを感じながら、取り組んでいる。

学校文化の変革はもちろん難しい。小さく広がりがないコミュニティで、十何年も全く同じ仲間と過ごす中でのチームの活性化といった課題は、一朝一夕では解消するものではない。しかし、小さいからといって、コミュニティが停滞、消滅するものでもないと考える。生徒たちは、少人数ながらも生徒会や各委員会活動で自治を学び、総合的な活動で地域へ貢献し、探究的な学びで自己実現をめざしている。我々教職員の組織も同様なのではないだろうか。

まずは、生徒同様、職員間も対話を重ね、保護者や地域とも対話する機会を増やして、共に目指すべき生徒像の共有を深めていきたい。夏期集中で痛感した「対話」の重要性と必要性。何かを変える、または、何かを生み出すときには、何が大切かその本質を見極め、お互いを認め合い、対話を積み重ねることが重要であることを痛切に感じている。また、既に国や県の教育施策にまで明記されているが、「真の教師になるためには、まず、学習者にならなくてはならない」という言葉は、やはり座右においておくべきであろう。教師自身の学習に対する情熱は生徒たちに刺激を与える。毎年、目の前の生徒の顔ぶれに変化がなかろうとも、実践者として、日々努力を重ねたい。小規模だからこそ、前例主義に陥ることなく、自ら学習者であり実践者であることを肝に銘じながら、躊躇無く改革に向け踏み出すことが必要なのであろう。省略すべきこと、してはいけないこと。変えるべきこと、変えてはいけないことなど、何ごとにも真摯に向き合い、考えていきたい。そうすることによって、なにごとも盲目的に前年踏襲で進めるのではなく、何のために、なぜ必要かを常に全体で捉え直すことができると考える。そのための「対話」に心がけたい。そこでの主語はもちろん「こども」である。それは子どものためになることなのか、子どものために変えなくてはいけないことなのか、変えてはいけないことなのか、検討し続

けなくてはいけないのだろう。そしてそこには、常に時代に即した生徒の未来像を結んでおく必要がある。

校内における仲間との協働には、教職大学院における学びが支えとなっていることを今、痛感している。省察の場とそこからさらに一歩を踏み出す力を与えてくれているようだ。きっとそこには常に「対話」があるからであろう。まだまだ道半ば。予測不能な未来を生きていく子どもたちのためにも、学びは続く。

インターンシップ/金曜カンファレンス報告

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井大学教育学部附属特別支援学校

岩本　幸裕

4 月からインターンシップが始まり、特別支援学校中学部に配属となった。学生時代には小学部の方に 1 ヶ月間教育実習を行ったが、今回の配属は中学部ということで新しい学部での活動がスタートした。はじめの頃は子どものこともわからず、信頼関係を構築しようといろいろな生徒に話をかけたり、遊んだりしていった。

中学部ではゆうゆうタイムやグループくらしといった附属特別支援学校特有の名前をしている授業が多々ある。私もそれらの授業に参加し、子どもと一緒に活動に取り組んでいった。６月頃には子どもたちの方からも話をしてきてくれたり、昼休みに遊びに誘ってくれたりと子どもたちともだんだん信頼関係が構築できてきたと感じた。前期のインターンシップでは固定のクラスには入らず、様々なクラスや授業に入いったが、どのクラスの先生方も子どもが主体的に、興味をもって活動に参加できるように日々授業の話し合いをしたり、教材を作ったりしている様子が見られた。私もそのような先生方を見習って、教材研究や子どもが主体的に授業に参加できるにはどのようにすればよいのかを考えていきたいと思う。

インターンシップでは中学部の 2 人の生徒と一緒に個別学習を行うことになった。個別学習の際にはメンターの先生も体験的な学びを作っていきたいといった思いも聞き、私自身もどのように体験的な活動から学びを作っていくのか考える時間となった。普段の個別学習では文章題を、具体物を動かしながら取り組んだり、パソコンでワードの使い方を学んでいったり一緒に生徒 2 人と活動を行っていった。夏休み前には私自身が個別学習を作って授業実践を行うことになった。私が授業を作る際にはメンターの先生からいろいろなアドバイスをいただいた。授業では旅行の計画を立てるといった活動を行った。個別学習を行う生徒が、日常で「水泳の大会に出るからしばらく遠征と旅行する」といった話が出たことにより、そこから子どもたちが自由に行く場所を設定し、計画をしていく旅行の計画の授業を行おうと考え実践した。その授業では、教師がどこまで子どもの活動に介入するのかという点について難しさを感じた。旅行の計画を子どもが自由に立てることを第 1 にしたために活動が停滞してしまうといった様子が見られて、旅行の計画という広い題材をどこまで教師が制限を入れていくのか、どこに学ぶ要素があるのかを考えていくことの重要性を感じた授業

実践であった。今後も授業実践をしていくことになると考えるが、子ども主体で考える授業というものを軸に、どこで教師のねらいを取り入れていくのかを考えながら授業作りを行っていきたいと思う。

後期からは前期に個別学習を行った生徒が所属する 3 組がメインに授業実践や子どもとの関りを持っていくことになる。インターン生として子どもの実態やどのようなことを身に付けていくべきかを丁寧に様子を観察し考えてきたいと思う。子どもが将来社会に出ていくときにはどういった力が必要となるのか、教師自身が身に付けてもらいたい力を明確にし、ねらいとして授業に取り込んでいけるような授業作りも先生方との対話の中で考えていきたいと思う。また、普段の先生方の授業の様子や子どもとのかかわり方も見ていき、自分自身に足りないものは何かを考えながら、学びを深めていけるようにしていきたい。

教育の始まりは「対話」から

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市至民中学校　揚原　佑

「コロナウイルスなんてインフルエンザみたいなものでこんなのすぐに収まるだろう。」

昨年そう思いながら地元福井に関東から帰ってきたことを思い出し、今回のレポートを書き始めました揚原佑です。状況は以前変わらず、ワクチンは打ったものの、デルタ株などの変異株等もあり、むしろ 1 年前よりも脅威は増している様に感じます。皆様もどうぞご自愛ください。後期は、対面でカンファレンスやラウンドテーブルにて実践を話し合えることを楽しみにしています。

前置きはこのくらいにし、教育を自分の職業にすることに”真剣”に志した約 2 年半の学びを振り返るところからまずは始めたいと思います。それまではなんとなく土曜の講義を受けながら、もし何もしたいことがなかったら、陸上部の指導は出来るし、化学もある程度得意だし、教員でも目指すかくらいの軽い気持ちで中高理科の免許の取得を目指しました。しかし、学部 4 年次に地元の中学校へ教育実習に行った時に経験したことがきっかけで、”真剣”に教員を目指し始めました。実習中は、授業よりも休み時間や給食といった時間での生徒との対話を大事にして、自分の経験や挫折を生徒に伝えていました。ある日、連絡帳の感想で「先生の話を聞いて、挫折を乗り越えることの大事さを学びました。いつもは負けるとふてくされてしまうけど、これからはそれまでの練習を振り返って、次の試合に生かしたいと思います。」と書かれていました。その時に、「自分の挫折や経験を生かせる場所はここだ。」と実感し、実習期間中に企業からの内定を辞退し教育を志しました。しかし既に教員採用試験の願書の受付は終わっていたため、指導教諭に相談すると「これから 1 年間教員採用試験のために勉強するのも良いけれど、教職大学院で教職について学びを更に深めるのもありだと思う。また、これからの教育はインクルーシブな学習環境を作ることが求められており、特別支援は今後マストなスキルになってくるから勉強しておくと将来に役立つよ。」とアドバイスを受け、現在はここ福井大学の教職大学院の特別支援専攻で学んでおります。

昨年度は、学部の授業を受けて特別支援教育について勉強したり、週に 1 回はインターンシップとして特別支援学校に行きながら、知的障害のある男児に主に関わったりしていました。そこで大学の先生から助言を頂いたり、インターンシップの 1 日の最後には彼との関わり方や支援の在り方についてメンターの先生方と話し合ったりしました。

自分は将来的に中学校の特別支援学級の教員、もしくは中学高校の理科で困り感のある生徒を巻き込んだインクルーシブな学習環境を作れるような教員を目指して、教職大学院で特別支援教育を学んでい

ます。その実現に一歩でも近づくために、今年度からは将来的に携わる可能性の高い公立中学校の特別支援学級でのインターンシップシップに行くことにしました。

しかし、インターンシップシップでは失敗続きでした。まず部活動では陸上部に関わらせてもらうことができ、自分が練習メニューを考えて生徒にやってもらうと、練習メニューが厳しすぎたのか疲労困憊の生徒が続出してしまいました。1,2 年生の理科の授業をして欲しいとメンターの先生からお願いされたため、理科の授業を週３日２回ずつさせてもらっていましたが、ある日授業放棄をしてしまう生徒が出てしまいました。

1 年間特別支援教育について学び、陸上については自分の経験(怪我で走れなかったこと、記録がある時期を境に急に伸びなくなったことなど)を踏まえて、スポーツ栄養学や運動生理学などの知識を身につけていました。ある程度の自信をもって指導や授業に臨んでいたので、正直に言って、これまで勉強してきたことは全く意味がなかったのかと思うほど落胆しました。

自分たち教材研究・教職専門性開発コースの院生は、週に 1 回金曜日にカンファレンスを行い、インターンシップでの学びや悩んでいることなどを語り合います。そこで自分の悩みを大学の先生も交えながら話しました。その際に 0 先生から「部活動も特別支援学級での授業でも、共通して対話やコミュニケーションが不足していることが原因で問題が起こっている様に感じる。練習に関しては以前までにどんなメニューを生徒たちがしていたのかとか、授業に関しても同じで、どの程度の学力なのか、どういうことに興味があるのかを対話の中から丁寧に詮索していかないと。教員が一方的に練習メニューを与えたり、一方通行な授業したりしてはダメだよ。始まりは全て『対話』からだからね。」と言われました。

「対話が大事」と、この大学院に入ってから耳にタコができるほど聞きます。それは教師と生徒との間ではもちろん、生徒の学びを支えるために教師集団として協働をする際にもこの「対話」が重要になります。教育の始まりは「対話」から。この言葉を胸に今後も教育についてインターンシップシップ、カンファレンス、ラウンドテーブルなど様々な学びの場で学んでいきたいと思います。

「見えないもの」に目を留める Part2

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務学校前期課程

仲村　俊太郎

本稿は、Newsletter No.147 で川西雄太郎さんが執筆された『「見えないもの」に目を留める』の文脈を繋ぐことを意識して構想した。その目的は、言語化されることがほとんどない、金曜カンファレンスの運営における学びの実態を明らかにするためである。「目に見えないもの＝信頼、安心」の視点から、私たちのコミュニティがどのように発展してきたのか、どのような課題があるのかを省察し、後期の運営に活かしていきたい。

本年度の運営が始まって半年が経つ。以前、提起されていた課題である「対話のゆがみ」の視点で運営を捉え直してみると、対話のゆがみを改善しようとする２つの動きがあった。１つ目は、運営会議のやり方の試行錯誤である。例えば、３～５人の小グループになって意見の交流を行うことや、司会が発

言していない人を指名することを行っていた。これは、より効果的なやり方を模索していた部分もあるが、自分の素直な考えを言いやすい環境づくりも意識していた。２つ目は、非公式の場での意見交流が増えたことである。ZOOM での運営会議が終わった後、何人かがそのまま残り、会議では言えなかった素直な意見を言い合うことが恒例となっている。他にも、偶然会ったときに金曜カンファレンスについて雑談する姿も見られた。このような非公式の場だからこそ、安心して自分の意見を言うことができており、そこで出た意見や疑問が下地となって、会議でも自分なりの考えを持つことに繋がっているように感じられる。その一方で、「対話のゆがみ」の新たな要因も見られた。それは「時間的な制約」である。運営会議で話し合うべきことは多く、さらに一つ一つがすぐに解決できるような議題ではない。しかし、「会議の時間は守る」という暗黙のルールがあるため、会議の流れを止めたり、決まったことを問い直したりするような意見は出しづらい。この会議の効率化は、質の高い意見が求められやすくなるように、対話のゆがみの要因の 1 つになり得る。このことから、対人関係による対話のゆがみの改善だけでなく、組織のシステムによる改善も必要なのだろう。

ここまでは「対話のゆがみ」に関して省察を行ってきたが、立ち戻って、コミュニティにおける「信頼、安心」に目を向けてみる。すると、新たな課題が出てきた。それは「班裁量による不安」である。金曜カンファレンスの学習活動のほとんどがグループに分かれた協働探求を行っており、学びの目的は統一されている。その一方で、どのように学びを進めていくのか、そのアプローチは班それぞれの判断に任されている。この班裁量という学習形態は、自ら既有のアプローチの思考錯誤を重ねることで、アプローチの質を向上させ、未知の課題に対しても柔軟に対応する資質・能力を同時に育むことに繋がる、と私は考えている。つまり、班裁量には、課題解決の型を自ら創造するという学びの価値がある。しかし、型がないという手探りの状態は、M２にとっては不安になりやすく、M１は学びの見通しが不透明になりやすい。また、その班の M２がどのようなアプローチを取るかによって、M１の学びが大きく変容してくると考えると、M２は責任を感じやすい。そのため、様々なアプローチに挑戦し、試行錯誤をすることに学びがあるが、失敗しづらい（＝不安）という現状があることも事実である。さらに、試行錯誤をする際に、他者の考えを参考にすることは重要であるが、その機会が少ない。なぜなら、前述で「会議の効率化」とあるように、ゆっくりアプローチを吟味し合う時間が取られていないためである。アプローチを十分に吟味せずに活動してしまうと、試行錯誤の機会が失われてしまい、ただ活動をこなしていくという状況に陥りやすくなる、と私は実感している。私たちは去年の金曜カンファレンスの課題として「学びの価値の実感」を挙げ、その課題を改善しようと新たなカリキュラムを構築してきた。そして、半年が経った今、同じ課題にぶつかっているように思われる。この課題をコミュニティとしてどう乗り越えていくべきなのか、私たちは再び問われている。

今回は、「目に見えないもの＝信頼、安心」の視点で、私たちの学びを省察してみた。この省察は、いかにカリキュラムをデザインするのか、そのためのコミュニティの在り方そのものを省察している。コミュニティの在り方を問い直す機会が少ない私たちにとって、本稿の執筆は良い機会であった。残り半年、私たちのコミュニティがどのような課題にぶつかり、どのようにして乗り越えようとしていくのか、引き続きその姿を記録し、省察を行っていきたい。

学校現場での体験的・実践的な学び

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立丸岡高等学校　東　哲平

大学院での学びが始まって早くもその４分の１が終わった。これまで大人の立場で高校の現場にかかわる機会はなかった。それこそ最初は期待と不安が入り混じっていたが、今では毎朝インターンに行くのが楽しみである。不思議な事だろうか。変わり者と思われるだろうか。教師という仕事を熱望しているからなのか、ふと考えてみると子どもとのかかわりが好きであると同時に学校というものが好きなのだろうと改めて自分を俯瞰した。この半年丸岡高校でのインターンシップを通して学部生の頃より圧倒的に「子ども」を見るということと「学校」を知るということがより色濃く自分の中でできている実感がある。

授業も何時間か機会を頂き、「現代社会」や「日本史」、「地理」といった異なる科目で実践することができ、地歴公民の授業づくりを複数の科目の視点で学ぶことができている。最初はとても緊張している様子が生徒にも伝わるぐらいであったが、ホームルームや他教科の授業観察などを通して少しずつクラスの雰囲気や生徒同士の関係性など気づけてきた点が増えてきた。授業をつくり実践して振り返っていくと自分で感じた課題もそうだが、観察者から得られるコメントは非常に大きい。気づかなかった点から指摘してもらえることで「あの発問はもう少し時間をかけても良かったな」、「ここの内容はもっと簡略化して主発問・テーマを絞るべきだったな」などとハッとさせられる。それが何度も繰り返される中で自分の中での授業構想にも膨らみが持ててくるのだと痛感した。同じテーマを扱っても、クラスの特色に応じて資料や発問、グループ学習か個人での調べ学習などを変えなければうまくいかないことも多く、子どもを中心に据えた教材研究の重要性かつ難しさというものを感じた。

あるクラスで（時期はずれるが）地理の授業を行った際、発問に対して自由に周りの席同士で相談しながら考えるよう促したが、グループを作って話し合う環境になっていないと中々話せなかったという状況があった。しかし、日本史の授業では率直に疑問に思ったことをためらわずに質問したり、つぶやいたりする場面が多く見られた。同じクラスでも異なる授業で当然見せる姿も変わるということが、それを同じ授業者という視点から気づけた。また、現代社会の授業では１つの授業を３クラスで実施する中で、それぞれのクラスで学習内容の躓きのポイントやグループ学習への取り組み方にも違いが見られ、今までの授業づくりの観点が自分自身変化したのを感じた。勿論教科内容そのものと向き合い教材開発を行うことも忘れてはならないが、同時に目の前の子どもに合わせて授業を考えていくことの難しくも面白いことを肌で感じた。

また、学校としての丸岡ならではの地域との結びつきを活かした教育や進路多様校故のクラス編成、独自の学校行事などを目の当たりにしてきて、子どもを見ることに加え彼らを支える学校組織、そして先生方の姿も見たり、共に考えたり、語り合ったりする中で教育実習の時には十分経験し得なかったことを学べている。それが毎回のインターンの楽しみへとなっているのだと思う。残り４分の３となった大学院での実践中心の学びをいかに自分なりの形としていけるか、定期的に整えられているカンファレンスという環境を有効に活用しつつ後期のインターンに励んでいく。

夏期集中講座報告

Following the Students' Learning Stories through Classroom Observation

学校改革マネジメントコース 2 年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

Rosero Michael Wilson Isaac

In my first year as a graduate student of the Department of Professional Development of Teachers of the University of Fukui, I was assigned to observe the Grade 1 classes in the attached compulsory education school of the University of Fukui.

I joined the class with the intent to learn about how teaching and learning takes place inside a Japanese classroom. Through my observations, I was able to immerse myself in the teaching and learning process that teachers and students follow in their lessons and long-term projects.

However, as I continue to observe different classes, I also learned a lot of things, especially when it comes to the process of classroom observation. In the Philippines, I was part of the team who developed the classroom observation tools, which are crucial in the assessment of teacher performance. When I visited a Japanese school and observed a class, I was also particularly curious as to how Japanese teachers are observed, what do observers focus on when they observe a class or a teacher, and what kind of notes do they write in their observation notes.

Recently, the Philippines' Department of Education has initiated a reform on classroom observation through the adoption of the Philippine Professional Standards for Teachers as a basis for performance assessment of teachers. In the past, classroom observation was weaponized and used to intimidate and find flaws of teachers. However, in recent years, the education department has ensured that classroom observation will focus on providing quality input for the continuous improvement of teacher practice and opportunities to share ideas and expertise and promote mentorship and coaching among colleagues. The current tools and protocols on classroom observation encourage observers to look into the actual teacher performance, identify their strengths and areas for improvement and encourage teachers to reflect and develop awareness about their own practice.

The said reform on classroom observation was a welcome development in the Philippine education system. However, when I compared it with the classroom observation practices in Japan, I realized a few things.

In the Philippines, observers and teachers have to follow the following process: pre-observation, observation and post-observation. During pre-observation, teachers and observers must identify and agree on the indicators that the teachers need to demonstrate. The observation will focus on these indicators and will be the basis for rating. During the observation, the observers must sit at the back and must not interact with each other. They must also avoid showing any facial expression that could influence teachers. Lastly, in the post-observation part, observers and teachers will

discuss their observation and feedback about the lesson.

In Japan, classroom observers can walk around the classroom and interact with the students. They can ask a few questions about how they understand the lesson and what they intend to do for their activities. Observers can also interact with each other during the observation process. In addition, the observers are mostly concerned with the appearance of the learners and how they respond to the teachers during the class and what strategies allow them to undergo a process of inquiry. Although I also learned that observers can do this because they have a prior understanding with the teacher (i.e. they are allowed or asked by the teacher being observed) and they do not do so on their own accord.

In contrast, classroom observation process in the Philippines tends to focus more on the teachers' performance. It is evident on the classroom observation rubrics, one of the classroom observation tools/forms that the teachers have to master because it will be the basis of their rating.

Looking into the rubrics of the classroom observation tools that we developed, as well as the protocols and practices, I realized that although the tools can guide the observers in assessing the performance of the teachers, it could take away the focus on the process of how students learn, how their interaction with the teachers and their peers influence their learning and behavior in the classroom.

I think that the Philippine classroom observation tools do not encourage observers to appreciate the process of teaching and learning, the flow of the lesson, the interaction between teachers and learners and their impact on learners. The process, more so, limits the observers from seeing student-teacher interaction that is crucial to student learning, how the actions of the teacher influence their learning, among others. The focus of classroom observation is on the outcomes of the teaching, not on the process itself. That is why some of the observers do not feel the necessity of staying inside the classroom for the entire duration of the lesson. As soon as the group work starts, they leave the room and stop observing. Observers also might also develop the tendency of nitpicking a teacher's action/performance in the classroom in accordance with the indicators that they need to observe.

I thought my work on the Philippine Professional Standards for Teachers and its performance assessment system for a long time can help me better understand the teaching and learning process. I initially observed classes in terms of domains and strands and descriptors of teacher quality. However, I realized that it somehow gave me a fragmented view of teacher performance, as I thought in terms of separate indicators. Having a list of indicators to be observed in mind might prevent an observer from seeing the class/lesson as a whole.

In Fuzoku, when I observe with other teachers or even alone, I often find myself drawn to the students. Listening to their little conversations, observing their reactions when a teacher does something, following their thought process and actions in class help me understand better how they learn. For instance, in an English class, I learned to focus more on the following:

•How did the teachers connect the previous activity to the current lesson?

•What strategies were introduced by the teachers to support students' understanding of the lesson?

•How did the students use the resources available to them (e.g., iPad, Google translate, textbook, picture dictionary)?

•What were the students talking/discussing about?

•What were the roles of the JTE and ALT? How did they support each other?

•How did the students interact with each other during the activity?

•What were the roles of the observers? How did they assist the teachers and the students?

•How did the flow of the lesson change based on students' response and questions?

Through this approach, I can follow and make sense of the story of learning of students. It also helps me take quality observation notes that could help the teacher plan for their next action and provide necessary interventions.

Observing classes in Japan made me realize that classroom observation plays a very important role not only in the evaluation of teacher performance, but also in the improvement of the design of their curriculum and delivery of the lesson. In lesson study, good classroom observation feedback is necessary to further enrich not only the teacher's performance, but also student learning.

Valuable Lessons in Reflective Thinking

ミドルリーダー養成コース M2/越前市小学校 ALT　**Charmoyl Roopen**

In the heat of July and early August I attended the Summer Cycles. As with the year before, these cycles consisted of 3 phases that each offered their own unique contributions to the way I reflect on my practice as an Assistant Language Teacher (ALT).

During the first phase, I concentrated on reading and understanding Deborah Meier's book, "The Power of Their Ideas"(1995,2002). The reason this book was chosen was almost entirely due to the title. Initially I had thought that this would focus more on students' input and initiatives in the classroom. The book certainly did explore the value of children's ideas, but focused more on how we as teachers could create an environment that adequately nurtures their young minds.

Being appointed to a school in East Harlem, New York, USA, Deborah Meier noted the difficulties that the schooling system and outlook on education at the time had introduced to schools in the East Harlem community. Through careful consideration of the developmental needs of students, the inclusion of the voices of people from the surrounding community and a strong belief in democracy, she pioneered a shift away from pure academic learning. Instead she, and the teachers that worked with her, made great efforts to respect student individualism, encourage creativity, and create a school that surpasses the low expectations that public schools tend to have.

As much as Deborah Meier seemed to write from a managerial perspective (at the time she was a school principal), some of her ideas still applied, and could be observed in my own practice. I tried to express some of these observances during our group discussions. Two of points that particularly stood out to me were, (1) how the smaller schools and classes affect the ability to effectively accommodate students of varying learning abilities, and (2) the impact of thoughtfulness as a teacher. As an ALT that travels between schools of many sizes, it is true that the smaller schools have allowed for more personal interaction with students. The student-to-student interaction as well as interest in lessons, feels greatly enhanced by the tighter sense of community in smaller classes. The teachers that I work with at smaller schools are also able to fine tune their teaching methods to suit all of their students. However, this is also true for some of the teachers that I have worked with at larger schools. But it was interesting to

note how these teachers did also first teach at small schools.

Finding connections between the readings during the Summer Cycle and my own practice were important to help ground the information I was reading. The same sort of thinking was applied to the second phase of the Summer Cycle, in which I read through Donald A Schon's, "Educating the Reflective Practitioner"(1987). However, this task was a little more difficult as the book did not directly talk about education. Instead, it focused on a necessary tool for our development as educators - Reflectivity.

It was admittedly tough to wrap my head around some of the concepts of reflectivity, especially since it used architectural design as a means to express ideas of reflection. But despite the technicality of this text, I was able to gain some valuable insight to the reflective process. One of the key take-aways from reading the first few chapters was the differences between "reflection in action" and "reflection on action". These two separations of the reflective process each have their own benefits to understanding our actions and informing our improvement.

I far too often have a "surface analysis" of my actions at school. Focusing a lot on "what" has been done during a lesson, and less on "why" it has been done. Through reading Schon's work, I realized that things such as the results of the lesson, the students' reactions and what they could mean, my own feelings as I am giving a lesson; All of these things have value and provide a broader spectrum of information to anyone that may read my long term research report at the end of this year. Reading this book has definitely enlightened me on ways that my own reflective practices can be improved. But it has also caused me to look back at how I had approached reflective lesson study last year and encouraged a bit of re-evaluation of my past writings.

Finally, during the final phase of the Summer Cycle, I focused on compiling some of the efforts made this year at my schools. In particular I talked about the change in attitudes of teachers, and schooling environments that I work in. Being a part of the DPDT Fukui and talking to various teachers has given me a broader understanding of the educational goals in the prefecture, and teachers' efforts and obstacles. With this knowledge I have had the confidence to talk more knowledgeably with the teachers that I work with. In turn this has garnered more trust and confidence in my input as an ALT when planning English lessons.

In my writing and discussions during this cycle, I recollected how meetings between teachers played a vital role in our lessons. During lesson planning discussions in school, finding out what the teachers' value in their English lessons has made it easier to understand and reflect on the lessons we conduct.

Listening to other Japanese teachers during our group discussions during these summer cycles was quite difficult, as the readings that everyone had chosen were all quite different, and sometimes very technical. It must have also been difficult for Japanese teachers to understand my explanations of what I had read in English and broken Japanese. Nevertheless, I appreciate the teachers that tried their best to listen to my discussions, and those that tried to simplify their words so that I may understand too. All in all, this Summer Cycle was yet another important step toward broadening my understanding of being an effective educator, and reflective practitioner. I look forward to finding more

relationships between what we read and what is visible in my own practice.

昨年と繋がり、次へ繋がる夏期集中講座

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井市安居中学校 川﨑　太地

今年の夏期集中講座は、Zoom と対面のどちらでも参加可能だったため、サイクル1、2についてはオンラインで参加し、サイクル 3 については対面で参加しました。ここでは、サイクル計 9 日間の中で強く印象に残っていること（大きく 2 点）について述べていきたいと思います。

1 つ目は、サイクル 1 での資料検討（『福井発プロジェクト型学習』））です。本書にも書かれている言葉でもあり、これまでの大学院生活の中でもよく耳にしてきていた言葉として「子どもたちの学びと教師の学びは相似形」というものがあります。私はこれまで、その言葉の意味の理解まではできていなかったように思います。子どもの学びは子どものもの、教師の学びは教師のもの、その形が似ていることなどないのでは、と考えていました。

しかし、このような考え方がサイクル 1 で大きく変わったことは実感しています。学 P に始まる子どもたちの学びを追体験していく中で、去年私が安居中学校で関わらせていただいた「共に創る」を意識した総合プロジェクトの実践を思い出しました。私自身が去年総合の中で悩み苦しんだ道のりと本書の中で附属の子どもたちが自分たちの企画の遂行のために苦悩していた姿は重なる部分が大きかったように感じます。

「共に創る」とは何かを探る一つの機会として安居中学校の総合に関わりましたが、その時時点では「共に創る」とは「生徒同士や先生同士、生徒と先生、地域の方と子どもたち、そして未来の地域と子どもたち」などといった大きな広がりがあるものであり、一言で言い切ることはできないと考えていました。そして今回、「共に創る」に様々な形はあれど、当時自身が苦悩しながら、先生方と情報共有する中でこれから先の道筋を考えだしたり、様々な部門を巻き込むことで自分たちの部門に足りない部分を見つけたりしようとする姿は、学 P での子どもたちの学びの姿とそっくりであることに気付きました。当時は、私自身の悩みに必死で子どもたちの学びの過程を自分自身が見取れていなかったから「子どもたちの学びと教師の学びは相似形」という言葉が腑に落ちなったのかもしれません。ただ、現状はようやくその言葉の意味を捉えられたにすぎません。理解したからどうしたいのかを自分自身に問い続けてインターンシップなどに還していきたいと思います。

2 つ目は、サイクル 2 最終日のクロスセッションでのことです。サイクル 2 では私は『学習する組織』を検討しました。『学習する組織』の中で人や組織が変われない理由について言及されており、たまたま私がそこを取り上げたからですが、クロスセッションの中で「変化（やりたくない／変化するのは嫌など）」が話題として挙がりました。変化を嫌う理由としては、これまでの方法が楽で、今までの「楽」が崩されるのが怖いからということが大きいと思います。変化に対して、人々は変わりたい思いはもちろんあるが、ブレーキがかかるから変化に抵抗を覚えます。では、いつブレーキがかかるのか。それはトップダウンで変化させられるときです。では、どうすれば良いのか。丸テーブルなどでの少人数での対話が 1 つの解決方法としてあります。少しやる気がなければ、周辺で聞いているだけでも良いという空気があれば、気付けば少し立ち上がり、さらに気付いたら輪の中心にいるということに繋がることも考えられます。この部分について、変化を嫌う理由から「なぜ？」を繰り返し考えながら解決策を見出す方法は「学習する組織」へとしていくための一つの方法だと私は捉えています。しかし、メンバーの方々と話していく中で、最後の部分（対話をする際

に、やる気がなければ周辺で聞いているだけも良い…後略）に関しては「実践コミュニティ」についても考え直す機会となっていました。

去年のサイクルでは、私は『コミュニティ・オブ・プラクティス』について正直2～3割ほどしか理解できていなかったと思いますが、今回のサイクルで、『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読んでいる先生方と話す中で、去年の夏期集中からの自身の実践を振り返り、新たな見方や考え方を見つけたり、新たな考え方を持っている自分に気付いたりすることができたと思います。普段の対話ではなかなか気付けない部分でもあるので、とても貴重な、実りある期間になりました。

記録から変色の部分に近づく
―3 年間の学年プロジェクトの活動から―

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

畑中　良太

夏の集中講義サイクル①では『福井発プロジェクト型学習　未来を創る子どもたち』を読み進めた。私は現在福井大学附属義務教育学校後期課程にインターンに行っているため、本書に取り上げられている学年プロジェクトにも関わる機会がある。去年はコロナ禍ということもあり、子供たちは満足な活動ができない中でもプロジェクトを実現させようと悩みもがいていた。8 年生の終わりにこれまでの学びを発表し一区切りとなるのだが、そこでの子どもたちのやりきった感、満足げな顔、沢山の学びの語りはプロジェクトの大きな成果だったと感じる。

私は学年全員で 3 年間共通のテーマを設定して探究をしていくというこの学年プロジェクトに大きな可能性を感じている。授業時間内には設定されているのだが、子どもたちはこの時間を授業という狭い枠で捉えてはおらず、学校文化・生活・社会という大きな視点で捉えながらプロジェクトを進めていく。これからの社会を創っていく力を学校全体で組織的に育んでいくことを目的とした場合、学年プロジェクトは重要な位置を占めるだろう。

本書は 3 年間という長期的なプロジェクト学習である学年プロジェクトの記録を中心に、プロジェクト学習の意義や必要性を問うものであった。読み終えて感じたことは長い歩みを描いた記録は本当に貴重なものであるということだ。長い取り組みの中で子供たちの学びの姿が共有され、その実践が価値あるものへとなっていく。実践記録の価値にはどのようなものがあるか。その 1 つが以下の問いから見えてきた。これは本書に載っていたエピソードである。

「モミジの葉はいつ紅葉するのか知っている？」

とある先輩教員が訪ねてきた。理科教員である記述者は自信がなく、

「秋。ある程度気温の低い日が続くと、クロロフィルが・・。」と教科書に載っていることをぼそぼそと回答した。しかしどうやらそんな趣旨の問ではない。この問いの「モミジの葉」は子どもたちのことであり、「紅葉」とは彼らが学び変容し、成長することを暗喩していたようだ。言い換えると「子どもたちはいつ学び変容し、成長するのか知っているか？」ということになる。

「何か大きな経験をした時」と私は考えていた。実際の学年プロジェクトの場面でも子どもたちはたくさんの経験から学びの実感を得て、変容・成長し

ているだろうと。この回答は間違いではないのだが正確ではない。子どもたちは 1 時間の授業で大きな経験をしたからといって変容・成長するわけではない。それまでの歩みとその経験が結び付き、さらにそれが未来の経験ともまた結びつき、ある時自分の歩みを振り返った時彼らは自分の成長を感じるのではないか。そう「いつのまにか」彼らは偉大な成長を成して来ていたのである。

「いつのまにか。誰も紅葉の葉の色が変色した瞬間を見ることはできない。」

これが先輩教員が投げかけた問いの回答であった。誰も子どもたちがいつ変容・成長したかを見ることなんてできないのだ。しかし、彼らの学びを長い実践記録の中から捉えなおしどのような力が培われていたのかを考えることはできる。本来誰も見ることができないその瞬間だが、記録という媒体を用いてその瞬間に近づくことはできる。

本書の記録からはその変色の瞬間に近づけた部分もあったのではないかと感じた。120 人での話し合いに本当に意味があるのか、課題を追究していくのならば個人や少人数のグループでそれぞれ興味関心、課題意識のあることをやった方が効率が良いし個々の学びが深まっていくのではないか、と思う人もいるだろう。しかし 120 人でプロジェクトを創り上げることを軸に活動を行っていくのは、そこに意義や価値があることを子供たち自身が実感しているからである。その実感の瞬間が記録には記されている。実感を通して学び、力を育んでいくのだ。今後は自分が記述する立場になることを見据え、長い展望をどのように叙述していくのか、どのような見取りから記録を創っていくのかを意識してインターンに臨みたい。

夏期集中講座から得られた世界観

ミドルリーダー養成コース 2 年/福井佼成幼稚園　福田　亘哉

「大学院での教育の話ってすごいな、いってみたい」と決意し、受験勉強で答申を初めて読み、園長先生と夜遅くまで付き添っていただいたのが本当に最近に感じる。気づけば卒業までもう半年しかないことに驚きを隠せない。今求められている子どもの力や小学校の現状などを、月のカンファレンスで語り合い、自分がやっている保育について、「なぜ、そういう保育をしたのか」をはっきりさせることができてきた。

夏の集中では「学ぶ組織」を読み、システム思考といった、問題を深く捉え直し本当の原因となるものを見つけるというものを学んだ。その時に考えた、職員会議での発言しやすい環境作りや、子どもの振り返りの時間の発展などをその後取り組んできた。しかし、マーチングのことに関しては振り返ってみると問題がいくつも起きているのに、深く捉えることをせずその時その時で、対処をしていることに気づいた。余裕もなく走り続けていると、考え込むことを忘れてしまうのだと理論をもとに理解した。今後、一度立ち止まって今あるマーチングの現状を捉え直してみようと思う。そう思えたのは、「学ぶ組織」を読む機会を与えてくれた夏季集中講座だ。自分の考えを次の段階へと導いてくれることに毎回感謝の気持ちである。

現在、佼成幼稚園の５歳児は、１０月７日のオープンスポーツデーに向けて、マーチングとリレーに取り組んでいる。今年は佼成幼稚園 1 年目の先生と一緒になり、初めて私が引っ張っていく立場になった。前の園で太鼓をしていた経験があるとのことなので、私はカラーガードの振り付けを担当した。3 年目にして始めてカラーガードの担当になり、進め方に苦戦した。まずは、振り付けのレパートリーの

なさ。自分は知っていると思い込み頭の中であれこれ考えてやってみたが、動きも変化もなくつまらないものになっていた。８月後半に入ってから動画を見たり、教室に１人で考えていたりしたら同僚の先生から「こんな振り付けもあるよ」といくつももらい、なんとか形にすることができて来た。しかし、カラーガードでいっぱいいっぱいで、太鼓のことに目を向ける余裕もなく進んできたので、一緒に合わせて見てやっと、「なんか入りのリズムあってない」「叩き終わりが分かりにくい」など、色々な点が見えて来た。リハーサルギリギリになって修正したり、考え直したりして仕切れなかった部分もある状態だったがなんとか全体で形にすることができた。今まで５歳児では自分の担当は太鼓で、太鼓のことだけを考えて進めて来たが、主任の先生たちの目の配り方や、気の配り方がすごいなと改めて感じた。

集中講座を受けた後には、自分の考えや世界が一番変われたと思う。大学院にいっていなければ読むことはなかった分厚いビジネス本に向き合い、訳もわからないなりに読み進めると、理解できるところに面白さを感じられる。そこで得られた発見を職場で試したり、プライベートでも試したりしてみると、今までの結果とは異なる結果になり、自分の力に取り込んでいける。大学院に入ってから 1 年半、私自身の保育が変わっていったと思う。1 年半前の保育を動画か何かで振り返って見たいと思う。

「読むこと」と「書くこと」

学校改革マネジメントコース2年　**林　雅則**

夏の集中講座の各サイクル３日間、これだけ大部の書籍を限られた時間の中で「読むこと」、あるいは短期間に自分の考えや実践を整理して他者に伝えるべく「書くこと」に集中し、日ごろ使っていない筋肉をいじめるように「思考の鍛錬」の場と感じたのは私だけだろうか。どうすればもっと楽に読め、スラスラと書けるのか。論理的読み書きにかかる専門的な知見は持ち合わせていないが、経験知豊かな達人といわれる人たちの技と理論的見解の一部から「読むこと」と「書くこと」について考え、これからまとめる「長期実践研究報告」に生かしたいと思っている。

「読書とは、インプットではなく、スループットだ。」知の巨人といわれた立花隆氏は、速読術を中心に読書のあり方を述べる。読みにくい本を何とか読んでしまう知的テクニックの第一は、その本の構造をつかむことにある。「大事なことは本を読むときに逐語的に文章を読み、逐文章的に本全体を順次読んでいこうとしないで、本全体の構造がどのようにできているか、その流れだけをとりあえずつかもうとすること」「全体は絵画読み、局部的に音楽読み」という極意を伝える。読んで頭に「ためる」のではなく頭を「通過させ」残った内容こそ、頭が無意識に選び取った重要な内容なのだと言う。こんな読み方で中身がわかるバックグラウンドには膨大な知識の蓄積があるからでもある。このことは「ボトムアップ」と「トップダウン」という読解の基本的プロセスの後者に当たる。ボトムアップのプロセスはまさに逐語的、逐文章的である。一方、トップダウンの処理とは、読み手自身が持っている知識やスキーマを利用して、文章の表象を構築する方向で行われるプロセスである。「テキストベース」といわれる文章そのものの把握にとどまらず、「状況モデル」と呼ぶ文章中の情報と読み手の持つ知識が統合される理解表象へとつながる（犬塚、椿本 2014）。だが、立花氏は言う。読書の「基本は、テクニックより熱中である。脳の働きは、熱中している対象に対して何倍も働きがよくなる。」夏の集中講座における読解の意義はそこにあるのかも…。

「とにかく書いてごらんなさい。」と、「書くこと」に背中を押してくれるのは外山滋比古氏である。「とにかく書き出すと、書くことはあるものだ。おもしろいのは、書いているうちに、頭の中に筋道が立ってくる。」「書き進めば進むほど、頭がすっきりしてくる。先が見えてくる。もっともおもしろいのは、あらかじめ考えてもいなかったことが、書いているうちにふと頭に浮かんでくることである。」と、まずは気軽に書いてみるように促す。Barbara Minto(1999)は読み手にわかりやすい文章を書くためにピラミッド型の構成を提示する。「頂上に主たる大きな考えがひとつあり、それを小さな考えのグループが下で支えるピラミッド」で、「主たる考えをまず述べることで、読み手はなぜそういう考えとなるか書き手に対して疑問を持つ」ことになり、「この疑問と答えのプロセスを繰り返せば、すべての考えを読み手に伝える」ことができるとする。外山氏は思考を整理するには「書くこと」に加えて「話すこと」「声に出すこと」が大切だと伝える。「思考は、なるべく多くのチャンネルをくぐらせた方が、整理が進む。頭の中で考えているだけではうまくまとまらないことが、書いてみると、はっきりしてくる。書き直すとさらに純化する。人に話してみるのもよい。書いたものを声に出して読めば、いっそうよろしい。」と、夏の集中講座における毎日の語り合い聴き合いの時間の意義を示す。

後日、今年の全国学力・学習状況調査の結果が報道された。「県教委が課題として挙げたのが記述と読解力。小中とも正答率が５割を切っていた。」（９月１日付け福井新聞）と、子どもたちの「読む力」「書く力」の課題を指摘する。『教科書が読めない子どもたち』（新井 2018）と言い表されて久しいが、教師をはじめ大人たちの「読む力」「書く力」も大丈夫だろうか。教師には、日常的に子どもたちの声に耳を傾ける「聴く力」や、一方的な説明ではなく子どもたちの考えを引き出す「話す力」は十分に身に付いているだろう。デジタルテキストの活用などより高度化した知識基盤社会の中で主体的な探究学習を深める子どもたちを支える教育専門職には、これまで以上の「高次リテラシー」が求められる。この夏の経験を機に、改めて「聴くこと」「話すこと」に加えて「読むこと」「書くこと」についても再認識してはどうだろうか。「人と話しているとき、顔の表情、ちょっとしたしぐさ、言葉の使い方などから、その人の気持ちを読み、その場の雰囲気を読む。これも言うまでもなく読み取りにかかわる。これは人の心の読解力にほかならない。」（樋口 2019）

【参考文献】

立花隆 2001；『ぼくが読んだ面白い本・ダメな本 そしてぼくの大量読書術・驚異の速読術』文藝春秋

犬塚美輪、椿本弥生 2014;『論理的読み書きの理論と実践－知識基盤社会を生きる力の育成に向けて－』北大路書房

外山滋比古 1986;『思考の整理学』筑摩書房

Barbara Minto1999;『新版　考える技術・書く技術－問題解決力を伸ばすピラミッド原則－』ダイヤモンド社

樋口裕一 2019;『「頭がいい」の正体は読解力』幻冬舎

「生徒に預けることで得たもの」を改めて振り返る

ミドルリーダー養成コース２年/岡谷市立岡谷西部中学校　**武居　悠輔**

教職大学院も２年目となり、「今年はどの実践記録を読もうか」「『学習する組織』を読む時が来たか」などと、ある程度見通しが立つ中での夏の集中講座となりました。何より、福井へお邪魔して、リアルな場で先生方とお話ができることを大きな楽しみにしていました。実際、Cycle 2 は対面での学び

は非常に有意義な時間となりましたが、Cycle 3 は、新型コロナウィルスの感染拡大と、お盆の豪雨で長野県内の鉄道が不安定となったため、オンラインに切り替えての参加でしたので、少々残念ではありました。今後のカンファレンスで、また福井にお邪魔できたらと思います。

さて、やはり夏の集中講座で印象深かったのは、Cycle 3 でまとめたレポートです。これは長期実践研究報告のテーマを見据えながらのレポートとなりますので、どのような実践にしようかと少々考えましたが、「これしかない」と思って選んだのが、昨年度に実践した、総合的な学習の時間の発表会をつくりあげるまでの実践です。自身にあまりネタがないというのも一つの理由ですが、「生徒に預ける」というコンセプトを大切にしてきた自分にとって、記録として残しておきたい実践でした。タイトルは「『生徒に預ける』ことで得たもの」です。

これまで教職大学院で出会った多くの先生方からお聞きする実践は、非常に力強く、そして興味をそそられるものばかりでした。そんな中、自分自身が少しでも誇れるものは何かと考え、いつもたどり着くのが「生徒に預ける」というコンセプトです。このコンセプトは、以前、一緒にお仕事をさせていただいた丸山先生から教えていただき、見よう見まねでチャレンジしてきたものではあります。そして、だんだんと自分の中で大切にしていきたい手段の一つとして位置づいてきました。まだまだ修行が必要な部分がたくさんありますが、今回のレポートで取り上げた実践は、現時点で私ができる精一杯の「生徒に預ける」実践であったことは事実です。

今回の実践は、「一本のドキュメンタリー番組をつくるイメージで、ステージ発表をつくってみませんか？ついては、中心となって企画してくれるメンバーを募集します。人数は問いません。やりたい人は武居まで申し出てください」という言葉でスタートさせました。この年の総合的な学習の時間は、「岡谷の謎を見つけよう」というテーマで、具体的には「丸山タンク」と「うなぎ」を学習材として進めました。６月に学習がスタートしてから、常に１１月終わりのまとめのステージ発表が頭にありましたので、プレゼンテーションスキルの向上を狙った学習場面も設定しました。結果としてその学習が、発表の大きな武器となりました。

上記のような呼びかけに対し、幸せなことに中心となってくれるメンバーに６名の申し出があり、レポートではその中から「斜眼革の MK」と「３年からまじめ男 YY」をメインに取り上げ、実際にステージ発表をつくり上げるまでをなぞりました。生徒の記録や写真をかき集め、振り返る作業は根気のいるものでしたが、間違いなく楽しいものでした。私自身、このステージ発表をつくり上げる実践の最中は楽しくて仕方がなかったからです。大変でしたが・・・。

このレポートのまとめで、ある生徒のありがたい言葉を一つ取り上げました。それは、「今までは先生に計画してもらい、私たち生徒が　やるという感じでしたが、今回は１から子ども達　でやってみて、自分たちでやったという達成感も、自分を成長させてくれたと思いました。人の笑顔を見ると、自分も良い気持ちになるので、今回の未来の時間では良い体験ができたと思います。」というものです。この一言で苦労は報われました。チャレンジして良かったと心底思いました。また、「『生徒に預ける』ことで得たもの」として、「生徒と同じ目線で物事を成し遂げる『マネージャー』としての経験」を挙げました。これは、生徒を活躍させる教師としての役割を果たすとともに、自身がミドルリーダーの年代に入り、職場の仲間に活躍してもらえるように動いていきたいという意識を持つことを意図しています。自分で成し遂げることよりも、仲間に成し遂げてもらえるように力を尽くせる人間でありたいと思っています。

夏期というにはすっかり涼しくなりましたが

ミドルリーダー養成コース２年/武生東高校　仲保　彰人

今年は７月下旬は学校の夏季補習かあり、８月上旬には光栄にもインターハイ開会式運営補助という大役を賜り、夏季集中講座が９月の予備日程に食い込むこととなりました。どうやら私一人だけだったらしく、生徒１人に対して２～３人の先生方という某個別指導塾もびっくりの手厚い体制となりました。お付き合いいただいた先生方にはこの場を借りて改めてお礼申し上げます。

さて、今年はサイクル１では斎藤喜博氏の「学校づくりの記」を読ませていただきました。戦後間もなく、まだ教頭というものすら整備されていない学校教育が未成熟な中で、生徒のために、そして学校で働く教師のために改革を進める斎藤氏の姿がとても印象的でした。「自分の目でよく見、自分の耳でよく聞き、自分の頭で考える」という言葉は、育てるべき生徒像として、時代を超えて現在でも教育の普遍的な部分を表しているものだと感じます。また、「新しいことを始めるためには今までのものを何か止めること」「上から課題を与え続けると、課題を待つようになり、自主性が育たなくなること」など、行政や現職教員の別なく、現代の教育に関わる方々にはぜひ読んでい頂きたい名著であります。昨年の伊那小学校の実践もそうでしたが、あえて自分の現在所属している校種とは離れたものを読むことで、学校教育の根幹をなす重要なものが見えてくるのだと改めて思いました。

サイクル２ではセンゲ氏の「学習する組織」を教材として選択しました。いかにもビジネス書といった風情で、「今日の問題は昨日の「解決策」から生まれる」など、書いてあることが核心を捉え過ぎていて読んでいて心が折れそうになりました。中でも私が印象に残ったのは「フィードバック・ループ」の発想です。物事は、自分が何かをして結果が出るというように直線的に起こるのではなく、その結果がさらに自分に影響を与えているというようにループ状になって起こるという考え方で、このループが複雑に絡み合って世の中は成り立っているということです。学校現場でも、教員と生徒、時には保護者のそれぞれが絡み合っているということを忘れずにいたいと思います。

サイクル３では、今年度の自分の取り組みを振り返ることで、長期実践報告の柱となりそうなものをなんとなくつかむことができました。あわただしい毎日を過ごす中で、自らを省みる機会というのは大事なことだと毎回のことながら感じます。

周回遅れながら夏休みの宿題が終わった気分ですが、これから待ち構える長期実践報告のことを考えるとあまり気が休まらない今日この頃です。

夏期集中講座の意味

学校改革マネジメントコース２年／高浜町立高浜小学校　松見　眞希

高浜町では、高浜カリキュラムプランの実施により夏休みが８月１日から始まった今年度、私はまだ１学期が終わらぬまま 2021 年度夏期集中講座 cycle １に参加することになった。学級を数日お任せして学校を離れ、オンラインで集中講座に参加することに多少の罪悪感はあったものの、また現実から離れて難解な理論や、素晴らしい実践記録を読みながら語り合いの中で理解を深めたり学びを得たりしつつ、ひたすらレポート作成に打ち込むこの集中講座を私は楽しみにしていた。夏の集中講座計九日間は確か

に苦しい時間の連続でもあるが、普段の自分自身の教育への思いや考え方を一度俯瞰してみたり、過去の実践から現在の取り組みへの脈々としたつながりと連続性を見つめ直したり再発見する素晴らしい時間である。また、なんといっても魅力なのは素晴らしい繋がりや出会いが待っていることだ。この繋がりや出会いが私の世界を大きく広げてくれ、視野を広げてくれる価値ある財産なのである。2 年連続「夏期集中講座をオンラインで受ける」というスタイルでの受講の中、それでも期待通り今回の集中講座も実りの多い素晴らしい成果があった。

さて今年 2021 年夏、2020 東京オリンピックが一年遅れで開会式を迎えることになり、

私は子どもたちに福井県出身のオリンピック・パラリンピック出場予定選手を毎日紹介した。子ども達は目を輝かせて聞いていた。このコロナ禍でワクチン接種は進むものの、なかなか事態の収束が見えない状況ではあったが私たちは頑張るアスリートを応援し感動をもらったことには間違いがない。今私たちの目の前にいる子どもたちにはどの子にも無限の可能性があり、将来何にでもなる事ができるのだ。この宝物を預かって私たちは日々同僚や仲間と共に実践を進めている。

Cycle１では「学校づくりの記　斉藤喜博著」を手にとって読むことにした。初版は1958年、今から63 年も前のことである。前回の東京オリンピックが1964 年開催であったのだから、それよりも前のことである。この斎藤先生の教育実践の特徴は、学校全体を通して行われていることである。一個人の実践ではなく、学校づくり、教師教育を通して、子どもの可能性を引き出し、先生の可能性を引き出し、村全体を巻き込んで子どもを育てる環境を構築している。このようなスケールの大きな実践は見た事がない。こんなにも古い書物に記された実践が、未曾有のパンデミックに襲われ日常生活の変化を余儀なくされながら、東京で57年の時を経て再びオリンピックが開催される運びとなった予測困難な今を生きる私たちに、いまだに新鮮にモデルを示していることに驚きを感じていた。

Cycle２ではピーター・M・センゲの「学習する組織　システム思考で未来を創造する」を読み、学校が「学習する組織」であるための 5 つのディシプリンについて考えてみることができた。そして、まるで自分がこれまで経験してきたこと、職員集団や組織についての体験に理論を後付けしていくような不思議な感覚を味わった。学校は企業と違い、目に見える利益を訴求する場所ではないのだが、「子どもの幸せ」という究極の利益のために働く組織である。私たちが子どもの幸せという利益を追求するプロの集団として互いに学び合う組織であるかどうか。これまで多くの職員室や学校組織に所属してきたわけであるが、良かったときもそうでなかった時も、学校として共有ビジョンを持つことの大切さやチーム学習という文化や考え方、動きを俯瞰して見ることは常に重要である。また私たちが良いチームであれば互いのメンタルモデルについてもオープンにして修正したり共通のものにしたりしていくことができるだろう。自己マスタリーとシステム思考の 2 つは特に学校という組織に重要なディシプリンだと考えている。私たち組織の一員の、個人の意思決定の積み重ねこそ教育活動として子どもに影響しているからだ。ビジョンを語り合い、現実との乖離について正直に向き合える環境を整えていくこと。私自身がまず自分自身の自己マスタリーに本気で取り組むこと、それについて語り合う場を（強制ではなく）設定することで人の心を動かせるつながりが築けるかもしれない。

Cycle１においても cycle２においても、このように考えたことは全てメンバーとの対話を通してのことである。一人で書物を読み悶々と考えていても到底辿り着ける考えではない。だから私はこの夏期集中講座が好きなのだ。必死に話して聞いてもらったり、他者の考えにひたすら耳を傾けたりしているうちに、こうして思考がまとまりクリアになっていく。そしてレポートに必死でまとめる作業からそれを深めていくことができる。そして同じ教育の世界で生きていくメンバーの方々との「同志」としてのつながりという素晴らしいご褒美まで頂くことができる。

さて cycle３では少し不思議な体験をした。カンファレンスや集中講座を通して語り合う仲間との出会いと共にファシリテーターの先生方との出会いももたらされるわけで、そこから私たちはやはり大きな影響を受けている。Cycle３でファシリテートしてくださった先生とは間接的に家族がつながっていたりしたこともあり、改めて私は人の繋がりの不思議と若手育成の責任について深く考えさせられる機会が得られた。この嶺南地区で若手が生き生きと子どもと共に育っていくにはどうしたら良いのか、またそんな学校作りを目指して私に何ができるのか。現在私は学校の中での実践的コミュニティの形成とそれを通した組織マネジメント理論を継続的に実践していく素晴らしさと難しさを同時に味わっている。もう何度も教職大学院では語ってきたが、私はある頃から学校組織や学校運営に目が向くようになってきており、学年や学級の枠を超えて、学校の子どもが「どの子もみんな自分の子ども」だと思える学校を作っていきたいと思ようになっている。保護者が安心して通わせることのできる学校、子どもが生き生きと学べる学校とはどんな学校かと考えた時に、私たち教職員のつながり方やその中での私たち自身の成長の歩みが子どもの学びに大きく影響することに行き着く。私たちが明るく元気に子どもを真ん中においてしっかりつながっていられるかどうか、そして“子どもになってほしい姿”に私たちがまずなっていけるか、と言うことである。子どもの笑顔と若手の笑顔がワンセットで目に浮かびつつ、これから未来の学校に何が必要なのか、自分が今、実践しようとしていることはなんなのか、問い返すことができたのだった。これは本当に不思議な体験であり、この cycle３が特に９日間の締めくくりとして深く意味を持った時間となった。

今回苦しくも楽しい学びの夏期集中講座の cycle１を終え、実践へのモチベーションを高めながら１学期がまだ終わっていない学校、子どもたちが待つ学級へと再度向かったのだが、理論と実践の交差（理論を学び実践の場へ持ち込む、実践から再度理論を学びなおす）という不思議な気持ちを味わったのだった。現場を離れず教職大学院で学ぶ意義を体感した今年度の夏期集中講座であった。

夏期集中講座

授業研究・教職専門性開発コース1年/岐阜聖徳学園大学附属中学校　市川　海斗

夏の集中講義では、cycle 1 で学校を変える力、cycle 2 でコミュニティオブプラクティスを検討し、cycle 3 では検討を重ねた実践を自信の実践と結びつけるということを行った。2 つの実践を読む中で、学校を変える力は学校改革がテーマであるため、少し規模が大きく自分自身の実践に繋げることがむずかしかったため、コミュニティオブプラクティスを通してどんなことを学んだのか、それをどう繋げていくのかを書いていく。

この実践のテーマである「実践コミュニティ育成の 7 原則」とは実践コミュニティを育成するために、どのようにコミュニティを引っ張っていけば良いかを示したものであり、実践コミュニティのような集団育成を目指す学校教育に大いに参考になる原則である。

まず 1 つ目は「進化を前提とした設計を行う」である。この本ではコミュニティを有機的なものとして捉えている。生きたものであり、常に移り変わっていくため、構造を押し付けるのではなく、発展させるために手を貸すことをしなければならい。これを自分の学びに置き換えると、学級経営の方法で考えることができる。学級経営をしていく際、担任にはそれぞれの理想の姿、教育観があるが、それを押し付けるだけではコミュニティは成立しない。「発展を促進すること」である。本の表現を使うのならば、「触媒」を提供する必要がある。

2 つ目は「内部と外部それぞれの視点を取り入れる」である。優れたコミュニティを設計するためには、コミュニティの本質を見抜くことの出来る部内者の観点が必要である。コミュニティが知識を開発し、世話する潜在能力がコミュニティにどれほどあるかを理解するためには部外者が必要である。クラス、学校というのはかなり閉鎖的な空間であり、外のことを学ぶ機会は少ないように感じる。まずは校内でもできる外との交流を活発にしていくことで、部外者からの学びを自分のコミュニティに生かすという子どもたちに学びの新しい視点を与えることができる。

3 つ目は「様々なレベルの参加を奨励する」である。コミュニティに参加する理由は人それぞれであり、コミュニティメンバー全員の参加を期待するのは現実的ではない。コミュニティの参加者は 4 種類に分けることができる。4 つの分類に属する人は固定されておらず、テーマが変わると、活動が続いていくと往き来する。成功するコミュニティは参加を周辺メンバーにベンチを作ったり、コアグループに指導役割を担わせたりと人を引き寄せる工夫をしている。義務教育段階では多様な子どもが一つの集団となって生活をする。目立たない子どもがどういう学びをしているのかをしっかりと看取り、評価してあげる必要がある。

4 つ目は「公と私それぞれのコミュニティ空間を作る」である。活気に満ち溢れたコミュニティはメンバーが集う公共空間と私的空間の両方で様々な交流が行われている。コーディネーターはこの私的空間を作るために、会合と会合の間の私的な時間を活用しなければならない。これは教師と子どもの公と私に分けて考えることができる。正式にいえば学校は公共の場であるため、子どもと接する私の時間というものは存在しないが、授業を公、休み時間を私ととらえるとこの原則を生かすことができる。子どもとの距離を縮めるうえで私の時間を有効に活用することは重要である。

5 つ目は「価値に焦点を当てること」である。コミュニティが繁栄するのは組織や、メンバーが属するチーム、そしてメンバー自身に、価値をもたらすからである。逆に言えば、価値を持たないコミュニティは機能しない。教育活動を行うとき、子どもたちが活動の目的を把握していることは非常に大切である。そのためには、子どもになぜ？と考えさせることが大切である。常に「なぜ」を子どもが理解しながら活動できる場面を作っていく必要がある。

6 つ目は「親近感と刺激を組み合わせること」である。成功しているコミュニティはメンバーにとって気楽な場所であると同時に、興味を引くアイデアや人が流入し続ける場所である。つまり、「マンネリ」状態になってはいけないのである。学び続けることにより、子どもに刺激を与えられるアイデアをストックしていく必要がある。

7 つ目はコミュニティのリズムを生み出すことである。人の生活にリズムがあるように、実践コミュニティにもリズムがある。発展の各段階に応じたリズムを見つける必要がある。クラスも一つとして同じクラスはない。それぞれのクラスに応じたリズムを教師が的確に見分け、使い分けていかなければいけない。

7 原則を学校のことに置き換えて考えてきたが、私が今後授業の実践をしていくうえでとりいれていきたいのは、3「様々なレベルの参加を奨励する」、5「価値に焦点を当てる」、6「親近感と刺激を組み合わせる」の 3 つである。この原則の学びを生かして後期の授業実践に取り組んでいく。

夏期集中講座から学んだこと

学校改革マネジメントコース１年/敦賀市立粟野中学校

瞿曇　俊雄

Cycle2 が始まる前に「コミュニティオブプラクティス」を読んだ。会社経営における組織の効果的な在り方について述べられている。私は、教務主任を務めて 6 年目になるが、今まで職員全体を組織として考えることはほとんどできていなかった。日々の業務で精一杯であり、また、時間的な余裕があるときでも考えが及ばなかった。今回、夏季集中講座でこの本と出会い、現職場での組織体制の課題や長所についてじっくりと考えてみる機会を得ることができた。そして、オンラインであったが様々な立場の先生方と対話することで、それぞれの視点、捉え方など多くのことを学んだ。

①人から学ぶ

Cycle２で私が読んだ本と同じ本を読んでいる先生がいた。岐阜県の附属中学校の先生で教科は英語である。私がコミュニティオブプラクティスを読むと、職員の組織運営法について考えてしまうのだが、その先生は、子どもたちのマネジメントとして学級や学年の運営を考えていた。私にはなかった発想であり、理論の汎用性を学んだ。もう一人、長野県の小学校の研究主任の先生も同じ本を読んでいた。勤務校での研究について、いろいろな困難にぶつかりながら組織を運営する方法について具体的事例を挙げながら説明してくれた。私自身の経験の中にも似たようなことがあり、共感できる部分が多くあった。すぐに解決できたり、明確な正解があったりするわけではなく、とにかく、悩み、語り、考えることが重要であることが理解できた。

②自分を振り返る

教員になり約３０年経過するが、過去の自分を丁寧に振り返った経験はなかった。新採用から今までの経歴を書き出してみると、まずいろいろな失敗が思い出された。また、その失敗したときの自分の考えや思いもよみがえってきた。それぞれの年代で、その年代だからこそ、そのときの人間関係だったからこそその考えや思いに至ったのだと改めて考え直すことができた。今、職場ではベテランと呼ばれる年齢になるのだが、自分の今の立場だけではなく、年代や人間関係なども考慮して周りの職員と接していかなければならないと感じた。

③最後に

人から学ぶということがどれほど重要であるかは以前からある程度わかっていたが、自分を振り返ることでも学ぶことができることがわかった。大学院はまだ半年ほどしか履修していないが、人から学んだり自分を振り返ったりすることで、少しではあるが「省察」の意味が感じ取れたような気がした。

ラウンドテーブルの振り返り

2021 年 6 月 19～20 日の 2 日間、行われたラウンドテーブル 2021SummerSessions に参加された多くの方から原稿を寄せていただきました。各 Zone、2 日目のラウンドテーブルでの語り合いから生まれたことをここに改めて掲載いたします。

やっぱり熱いリモートラウンドテーブル

福井市殿下中学校 高松 由紀子

7 年ぶりの異動、しかも管理職として右も左もわからなく、とりあえず動いてみる毎日が続いていたときに開かれた研修。講師は前学校教育監清川亨先生。厳しいお話になるだろうと最初構えて聞いていたが、管理職として、こうしなさい、ああしなさいといった話は一つもなかったように記憶している。かえってそれが新鮮で、Will の自分になろうと前向きになり、パンパンに張っていた肩の力が抜けていった。清川先生が最後の最後で、今回のラウンドテーブルをちらっと宣伝されていたのが心に引っかかり、勢いで申し込んでしまった。

とはいえ、タブレット越しのラウンドテーブル･･･はたしてラウンドテーブルとして成立するのだろうか。自分が大学院にいた頃のようなLIVE感を感じられるのだろうか。おそるおそるリモートをつなげてみたが、その心配は全くの杞憂だった。ZONE Ｂの先生方の深いご実践や熱い思いは、画面越しから強く伝わってきた。かえって、リモートの方が声が間近に聞こえて、自分としては集中して聴けたように感じている。中でも、麹町中のお話は、いかに自分が教員としての固定観念に縛られていたかに気づくことができた。

お話を聞いた後の小グループでの Session。大学院２年目の先生お二人と同じグループだった。武生西小の川端先生と高浜小の松見先生、中堅としてばりばり働いていらっしゃるのはもちろん、ZONEＢのお話を自分のものとしてとらえ、自分の学校全体の改革へと話が広がる。自分がこの年齢の時、こんなに視野を広げて考えられただろうかと反省しきりになる。と同時に、その刺激を受けて殿下中でやりたいことが見つかっていく自分もいた。

そして、ファシリテーターの先生は、奇しくもあの清川先生。私達３人の話を温かく受け止め、話を自然と学校マネジメントの方向へといざなってくださる。４人での Session がとにかく心地よかった。

うまくまとまらないけれど、ラウンドテーブルは、ご縁と自分を見つめる時間をくださる貴重なものであることは間違いない。ラウンドテーブルに参加したからといって、すぐに何かが身につくわけではないが、こうやって参加し続けることで、学び続ける教員のはしくれになっていたいと思う。

ラウンドテーブルに参加して

群馬大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻特別支援教育実践開発コース 2 年

小林　和佳

新型コロナウイルスの流行が拡大した当初、私たちは、それまでの自身の学びの在り方に対する大幅な変更を余儀なくされました。「実践の場に身を置く中で浮かび上がる様々な思い、課題や疑問を他者と共有する」という日常に対しても制限を受けるようになった昨年、何とかして学びの機会を得たいという思いから、初めて参加したのがラウンドテーブルでした。そして、今回が 3 度目の参加となります。

ラウンドテーブルには、保育や教育、福祉など、様々な分野を専門とする人が集まります。したがって、そこで報告される実践の内容もまた、多様性に満ちています。

一方で、多種多様な報告の中にも、共通点を見出すことができ、それは、実践が展開する過程に、必ず実践者自身の自己更新が伴っているということでした。こうした事実は、本大会に参加された方々が、「自身の価値観や働きかけに変化が生じた瞬間」を「実践者としての自身に学びが生じた瞬間」として、大切にされていることを意味しているように感じました。

私自身はこれまで、学校内外の実践の場において、障害を有する子どもとの教育的係わり合いについて学んできました。専門的力量を高め、出会った子ども一人ひとりに対してそれを還元したいという思いはあったものの、学校運営等の組織作りの話となると、どこか自分事として捉えきれずにいました。

しかし、ラウンドテーブルへの参加を通して、実践には、各分野の対象となる人に対する実際の働きかけに関するものだけでなく、そうした仕事のマネージメントに関するものまで、幅広く存在することを知りました。そして、立場・経験・価値観の異なる様々な人と、如何に連携を図るかということが、実践の場において問われてることに気付かされました。

ラウンドテーブルの取り組みは、まさに、他者と協働することの重要性を体現しているように感じます。ここで様々な人と出会い、語り合った経験をエネルギーとして、今後は他者との協働という視点からも、より良い実践の在り方について問い続けていきたいと思います。

ラウンドテーブル（ZoneB）に参加して

岐阜大学大学院教育学研究科教職実践開発専攻　河野　純子

ラウンドテーブルに参加したきっかけは、「学びの機会になる。」と石川教授に紹介していただいたからであった。要項や、事前の福井大学教職大学院からの丁寧なメールで概要はつかめるのだが、参加者 700 人以上のところ小グループでの協議を行う、という説明には半信半疑であり、半ば受け身の意識で参加した。

しかし、実際は非常にエキサイティングな会であった。Session Ⅰ では、話題提供も実践報告も Zone Ｂのテーマである、「教育の質的向上や人材育成と働き方改革との両立を目指した実践」に即しているのだが、校種や、役職、県の体制などによって、それぞれの特色が非常に際立っており、全てが興味深かった。

続く SessionⅡに参加して、「あっ」と思った。たった 5 人の小グループなのだ。それも、校種、役職、県も見事にバラバラであった。だからこそ、最初の自己紹介から興味津々で、一言一言が新鮮であった。異種集団（？）のため、それぞれの立場から出る意見が貴重であるから、参加者全員が話を傾聴する。また、討論をする時間が十分に確保されているため、何度も発言の場がある。参加者が聞いてくれる安心感があるから、積極的に発言ができる。様々な要因が活発な議論を引き起こし、受け身であったことも忘れ、非常に充実した時間を過ごすことができた。その中で、実践を多様な立場や方向から省察する意義深さを体感した。異種集団であっても、「教育に携わる者」という根本が共通していれば、十分話し合いは可能である。共通する部分に共感することもあれば、異なる部分から学べることも大きい。

また、「みなさんのように実践をしたいが、職員をどう巻き込んだらよいのかわからない。」という実践以前の悩みにでさえ、心構えや具体的な事例をあげてそれぞれの立場から助言をくださった。疑問や悩みを否定せず聞いてくれたり、それぞれの実践から話を広げたりしたので、話し始めると話題に事欠かない。これはファシリテーターの方の力も非常に大きく影響したと思う。必ず発言の言葉を引用して、話題を振り、つなげてくださった。

ZoneB に参加して、実践も勉強になったが、研修会の体制、対話の在り方、ファシリテーターの力量、メンバー構成、進行の仕方なども非常に勉強になった。何より、省察の楽しさを味わった。このような素晴らしい世界を見させてくださり、このような場を与えてくださった福井大学教職大学院の温かさ、きめ細かさに感謝してもしきれない。

ラウンドテーブルを終えて、日本全国の先生方が頑張っていることを実感し、大きなエネルギーをいただいた。福井大学教職大学院のために、何かしたい、と思うのは自然なことだろう。

ラウンドテーブル 2021 Summer Sessions に参加して

坂井市磯部小学校　笈田　美香

私は、福井大学附属義務教育学校での勤務経験があり、ラウンドテーブルに毎年参加していました。今回、元同僚の誘いで公立学校に戻ってから初めての参加となりました。附属学校では、大学との連携もあり、今必要とされる教育について学び、話し合い、実践につなげていく機会が必然的にありました。公立学校に戻り、研究主任をしている今、本校の課題を解決するために、どのような取組を行っていくといいのか日々悩んでいました。そのような時に、ラウンドテーブルに参加することができ、新たな学びや日々の自分を振り返るために、とてもいい機会になりました。

午前中は、「理論と実践の融合」に関する大学の先生の話をお聞きしました。印象的だったのは、「理論は、ロングスパンの実践の省察の中で、自己の発達観・学習観・教育観を通して融合すること。異質性の高い相手との対話が大切だということ。」です。教師の学びにおいて、自己省察およびコミュニケーションの重要性を改めて実感しました。また、「教員の専門性とは、教員と子どもの相互作用の中に持ち込まれて初めて意味を帯び、両者の関係なくして存立しない概念であること。」です。教員と子どもたちとの双方向および互恵性の関係が大事であり、共同作業の中で、授業を創り上げていくことを忘れてはいけないと思いました。

午後からは、「学校/インクルーシブ：21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う～多様な子どもたちの学びと育ちを支える教職員集団～」

に参加させていただきました。３つの実践報告をお聞きし感じたことは、午前中の話につながり、教員の都合や思い描いたレールの中で学習を進めていくことは絶対にいけないということ。みんなとは違う考えや行動をしている子に対し、「どうしてそう考えたり、思ったりしたのか。なぜ、そのような行動をとったのか。」教師が子ども目線に立ち、子どもの思いを読み解くことが大切であること。多様な子どもたちの思いを「教師との対話」「子ども同士の対話」「子どもと『もの・こと』との対話」を通して、寄り添いながら授業を創り上げていくことが大事であることを実感し、今までの自分を反省しました。

その後、現場の違う先生方や院生とのグループトークが行われました。自分の実践を聞いてもらい認めてもらえると、自分がやっていることに間違いはなかったと安心できたり、新たなヒントをもらい実践につなげていきたいと気持ちが高まったりと貴重な時間・楽しい時間を過ごすことができました。

ラウンドテーブルで学んだことを実践していけるように努め、本校の先生方にも発信していきたいと思います。ラウンドテーブルに参加させていただき、本当にありがとうございました。

ラウンドテーブルに参加して

福井県立藤島高等学校　**島田　直子**

仕事に忙殺され、昨年はラウンドテーブルに参加できなかったが、毎年夏か冬のラウンドテーブルに参加するようになり１０年が経つ。私がラウンドテーブルに参加する理由は、この場が教員として、私自身に何ができるのか問い続け学び続けることができる場だと考えるからである。確かに、書物を読んだり講演に参加したりして自己研鑽に励むことはできる。しかし、様々な地域の先生方と直に話すことができるこのラウンドテーブルは、私にとってどんな機会にも代え難い研鑽の場である。

多くの先生方や公教育に携わっている方々と意見を交わしたり、その方々の実践を省察したりすることで、毎回必ず発想の起点をいただく。複数の実践を省察することで、発想がつながり、行動に起こすきっかけを得ている。私にはこのラウンドテーブルが、他の人の実践を聞きながら自身の実践を省察する場にもなっている。さらに、学会に発表を、と考えなくても、ラウンドテーブルで発表することで様々な意見をお聞きすることができ、学会と同様の学びを得ることができる。加えて、１日目の ZoneE では生徒の率直な意見も聞く機会を得られるという。私だけかもしれないが、年を取るにつれ、生徒の率直な意見を耳にする機会は減ってきている。全てを生徒の意のままに行うことは不可能であるが、生徒の意見は授業内容等を変える手掛かりとなる。こんな魅力的な場はない。

今年も生徒の意見や他の先生方の意見をお聞きして、私の授業内容や担任としての取り組みを見直し始めている。このラウンドテーブルは、本当に大切なものとなっている。いつかは英語のセッションに参加し、海外の教育を参考に自身の教育を振り返れたら、と密かに考えている。

つながり

福井県立鯖江高等学校 2 年 山田　煌桜

「つながり」。初めて参加した実践研究福井ラウンドテーブルの 2 日間を一言で表現するならば、この言葉がぴったりだと感じた。

私は高校で「教育×まちづくり」をテーマに課題研究を行っており、教育とまちづくりの関係性に関心を持っている。教育に関しては普段から高校生の立場で関わっているので、多少は理解しているが、まちづくりに関してはなかなか関わる機会が無く、ほとんど分からない状態だった。そんな時、知り合いの大学生と高校の先生に紹介していただいたのがこの実践研究福井ラウンドテーブルだった。私はラウンドテーブルに参加すると決めたとき、教育や地域に携わっている方々の話を聞くことや、話をすることができると思い、とてもワクワクしていた。

ラウンドテーブル 1 日目。私は ZoneC コミュニティ に参加した。ZoneC には大学生や学校の先生、教授や普段から地域で活動をしている方など多種多様な方が参加されていて、高校生の私は自身の視野を広げることができた。Session Ⅰ では中山間地域での大学生の活動、Session Ⅱ では生徒と地域の方のコミュニティ協議会の実践、2 つのコミュニティについての報告を聞き、参加者の方と共に持続可能なコミュニティとは何かや、学校と地域がどのように関わっていけば良いのかなどを考えることができた。今までコミュニティを作り、そのコミュニティをどう活性化させれば良いかと「つづける」ことしか考えたことがなかったが、今回の ZoneC で、作ったコミュニティを他のコミュニティと「つなげる」ことでより持続可能で存在意義を持ったコミュニティであり続けることができるということに気づくことができた。

ラウンドテーブル 2 日目。クロスセッションで聞き手として、普段小学校や高校で勤務されている 3 人の方の実践報告を聞いた。コミュニティを通した学校づくりや、地域と学校の関わり、その地域の学校間での関わりなど、高校生の私が普段知ることができないようなことをたくさん知ることができた。実践報告より教員同士、生徒同士、学校と地域同士など、やはり「つながり」が大切だと感じた。

この 2 日間、全国から様々な年代の方が参加していたから、普段の私には気づけないことに気づくこと、教育と地域について深く学ぶことができた。ラウンドテーブルを知るきっかけとなったのは知人との「つながり」。ラウンドテーブル参加中は、全国の方々との「つながり」を通し、学校や地域、コミュニティの「つながり」を学ぶことができた。だから今回のラウンドテーブルは「つながり」という言葉で表現できると考えた。初めてラウンドテーブルに参加したが、非常に貴重な経験となった。この経験をこれからの地震の活動につなげていきたい。そしてまたラウンドテーブルが開催される時、参加したいと思う。

ラウンドテーブルに参加して

八丈町立大賀郷中学校校長 石井　謙次

私はこの 4 月に校長職に昇任した。着任した学校は東京都の南約 300 ㎞にある八丈島の八丈町立大賀郷中学校である。実は 4 年前までの 3 年間副校長として勤務していた学校であるので、今回の異動は不安よりも島の子供たちの教育を充実させるという念願がかなった喜びの方が大きかった。私はこの島で

コミュニティの価値、コミュニティの中での学校の役割を知り、そして島の子供の可能性に応えることが使命と考え、島に校長となって戻ることを誓ったからだ。島を離れた 4 年間は福井大学教職大学院の拠点校の一つである板橋区立中台中学校に赴任し、そこでこのラウンドテーブルを知った。去年の冬は中台中学校で様々な実践をしてきたので、学校での取組について語ることができたが、今回はまだ着任して 2 か月ほどしか経っていないため、クロスセッションへの参加は躊躇した。しかし、このラウンドテーブルからは自分が前進していく刺激を得られた経験があり、せめてZoneへの参加によって情報だけでも得られたらという思いで申しむことにした。新米校長として、ネットワークを広げたいという下心もあった。

私の参加した「Zone C　コミュニティ」では、福井大学国際地域学部から伊藤勇先生と学生の片山留菜さんの「中山間地域の現状と課題・国際地域学部での PBL 活動・上見味地区での活動報告」をお聞きし、中山間地域と島しょという違いはあっても、コミュニティの空洞化という課題は共通しており、その中で学生による PBL が学生の学びだけでなくコミュニティにも役割を果たすことが確認できた。実は、以前、島の副校長でいたときに描いていた理想の教育活動への青写真と重なるものであったので、お二人のお話によって自分のプランに自信をもつことができた。また、その後の小グループでのセッションでは、島しょからの参加ということで関心をもっていただき、（今回は聞くだけと思っていたので）期せずして自分の抱える「誇りの空洞化」に対する挑戦について語ることになった。語ることによって自分の中に澱のように留まっている今後の見通しの断片が整理され、形を成してきたのが実感できた。二人目の話題提供者である新潟市立葛塚中学校の上村慎吾先生の報告では、コミュニティスクール或いはコミュニティと学校の関わり方について、町の教育委員会や自校の教職員及び地域の核となる人々へ説明するのに大変有効な実践例をうかがった。特にOECD ラーニングコンパスに示されている生徒エージェンシーの概念の導入は、地域の中における学校の役割を明確化するうえでも重要であり、授業づくりの要素として忘れてはならないものとして、本校の教職員へ伝えたいものであった。

ファシリテーターの冨永良史先生が画面越しに「それぞれのドラマを語りましょう。そしてそれは終わらないドラマです。」と熱く語られたが、来年、私のドラマが語れるようにこれからの 1 年間への闘志を新たにできた時間だった。

ラウンドテーブルに参加して

同志社中学校　竹山　幸男

2021 年サマーセッション 1 日目の午後のプログラム、ゾーン A　学校「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」に参加させていただきました。福井には、本校の学校建築で教科センター方式を採用したつながりで、至民中学校や丸岡南、安居中学校を訪問させていただいたり、松木先生や木村先生を通じて福井大学附属義務教育学校の授業研究の取り組みの紹介を受け、コロナ前には教員全員で訪問させていただいたり、ラウンドテーブルやさまざまな企画にも教員、生徒とともに参加させていただいたりと日頃よりお世話になっているところです。

前半の発表では、小学校から中学校、高校、中でも特別支援コーディネーターの先生や昼間定時制での通級学級指導や支援に関わる先生方の実践発表も具体的にお聞きすることができました。小学校から高校まで、一人ひとりの子どもの成長の流れを長いスパンでイメージしながら、それぞれの段階での発

達の課題とそのケアやサポートの在り方、職場での課題意識の共有と対応の具体化、生徒たちの関係性の中での成長などについても考えさせられました。実践発表の途中で松木先生からチャットで提示された「困り感のある生徒」を担任、担当する際の苦労、不安などの共通点はありつつも、自分の所属している学校種以外の先生方から語られる内容は、今目の前にいる生徒たちの成長の足跡や未来の可能性について確認することができ、新鮮さとともに励ましを受けたように思います。

後半の部では、中学校の先生から校長を経て福井大学で教えられている先生、幼稚園の先生、教職大学院生として中学校で実践されている先生とグループで話り合いました。例えば、

浅間小学校の山下先生の実践について、先生の子どもを見る姿、目線が変容していくプロセスに着目しながら、子どもの語りや対話、動きがどのように変化していくかなどを振り返ることができました。語り合いながら、とても和やかで温かい気持ちになりました。私と同じ中学校現場での実践では、「困り感のある生徒」に「困っている教員」の困り感の共感、共有、問いかけからスタートする大切さをあらためて教えられつつ、今私の取り組んでいる課題についても、親身にグループの皆さんが聞いていただきいろいろなヒントをいただくことができました。後半のグループの語り合いでも、校種や経験の多様性によって、日頃気づかない視点に目を向けながら、自分の向き合っている現実や課題に対しての実践を重ね合わせたりすることが、より広く深く行えたように思います。ブレークアウトルームでの語り合いは慣れればお互いの距離がとても近くなっていくような不思議な感覚も味わえました。

本日のようなセッションがこれからもまた続けられていくことを期待して、参加させていただいた御礼と感想とさせていただきます。ありがとうございました。

6 月ラウンドテーブル（zone B 参加）を経て

ミドルリーダー養成コース 1 年/多良間村立多良間中学校　上里　公人

私にとって、6 月のラウンドテーブルは職員への声かけや提案の仕方を見直すきっかけとなりました。

私は現在勤務校で研究主任という立場であることから、職員が学び合う集団へとなるために何が必要か、ヒントがほしくて zone B「働き方改革と学び合う学校づくりー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー」に参加しました。その中で私が学んだ（気づいた）ことは、「どのような取り組みをするか」ではなく、「（取り組もうとしていることを）どう捉えてもらうか」が重要なのではないかと考えました。

まず、はじめに福井県教育庁の竹澤課長からは働き方改革の現状から話題提供があり、その中で「高めてほしい業務マネジメント」として①　チームに任せる　②　外部人材に任せる　③　児童・生徒に任せるのを挙げ、ゆとりを持って子どもに接することで、学びが高まる「いきいきと子どもに接する魅力ある教師集団」という提案がありました。

次に、鹿谷小の北川校長からは「学校内外に、学びのコミュニティを形づくる」という実践報告があり、学校内の実践として①　時間・場所・活動が生まれる　②　一人でかかえこまない校務分掌③　既にある授業研究の活用　④　気軽な授業公開文化　⑤　学びに出かける。校外では「ユルい学習会」の取り組みを話していただきました。

私はとくに、「一人でかかえこまない校務分掌」の取り組みが素晴らしいと思いました。校務分掌を複数人で担当することで職員間の会話が生まれ、時間や体力だけでなく精神的にも負担軽減を図ることが

できるこの取り組みは私の勤務している地区にも取り入れてほしい取り組みだと思いました。

高志高の吉田校長は教師の仕事を荷物に例え、抱える荷物を減らすためには「本当に大切な荷物と、そうでない荷物を選別する」「大切な荷物を減らす」「そうではない荷物はすてる」とし、選別の基準をどこに置くかを考えるものと提言していました。学校や教員の「本質的な仕事」は何かを考えることが必要で、それによって生徒を「教える」教師から、生徒の学びを「支援する」教師へとなるのだということでした。

共通して、教師側の精神的な負担間の解消に向けて、時間や仕事量の改善に加えてはたらく教員の意識を変えていくことも必要だと伝えていただいているように感じました。

以上の学びをふまえて、私は実践の提案ばかりを考えるのではなく、職員の意識を向けることや精神的なゆとりを持たせて、取り組んでもらうことを考えるべきなのではないかという考えにいたりました。形にばかりこだわってしまっていたため負担感を取り払えていなかったことを反省し、先生方が取り組みやすくなる形に変えながら現在提案しています。また、仕事を一人で進めようとしていたことも改善する必要があると思いました。校務分掌の複数名担当や仕事の見える化もとても参考になりました。互いの仕事を理解し、一緒に考え、悩み、喜べることが「協働」なのではないかと思いました。私はこれから、お互いが前向きに楽しんで行える校内研を提案できるように工夫していきたいと思います。

6月のラウンドテーブルに参加して

ミドルリーダー養成コース1年/町田市立武蔵岡中学校　**内村　佐保莉**

コロナ禍、これまで当たり前だった様々な活動が制限され、我慢を強いられる場面も少なくありません。今年度もその影響を受けながらのスタートとなりましたが、一方で新たにできるようになったこともたくさんあります。今回のラウンドテーブルに参加した経験は、生徒にとっても私自身にとっても大きな変化のきっかけとなり、新たな活動への契機となりました。このような機会を与えてくださったこと、またご協力くださった先生方には感謝の思いでいっぱいです。

今回、４名の生徒とともにZONE E「学びと教えのあたらしいすがたカタチをみんなでかんがえよう」に参加し、実践の発表をしました。昨年度参加させていただき、このラウンドテーブルでの経験が生徒自身を大きく成長させ、参加してよかったと思える機会であることは実感していましたが、それを伝えることや気づかせること、なにより生徒自身が自ら「参加したい」と思えるよう促すにはどうすればよいかと悩みました。しかし、昨年度参加した先輩たちがラウドテーブル後自信をもって学校生活を送っている姿を見ていた生徒たちは、興味関心が大きく、Zoom を使って全国の人とつながる機会を得られることに喜びを抱いていました。どんなに生徒にとって学びの多い活動であったとしても、生徒自身が主体的に取り組まなければ深い学びにはなり切らない。しかし「進んで取り組みなさい」と言ったのでは主体性は生まれない。生徒自身が探究心をもって取り組んだからこそ、多くの学びがあり生徒自身を大きく成長させるのだと悩んでいましたが、先輩の姿が既に心を動かし新たな学びに向かわせてくれていました。当日は、地元地域の伝統芸能を全国の方々に知ってもらいたいという思いから、140 年の長きにわたって受け継がれてきたお囃子について紹介しました。それぞれが担う校内での役割や日々の活動に加えての準備に不安もありましたが、その準備期間をも愉しむ姿からは、生徒自身から湧く探究心を感

じました。普段はあまり積極的な言動が見られない生徒たちでしたが、計画的に準備したり必要な情報を収集したり、主体的に活動する姿がたくさん見られました。また当日のセッションにおいて多くのアドバイスや感想をいただいたことがさらなる原動力となり、１学期末のイベントを企画し、先日体育館にて実施するにいたりました。今回の参加により生徒たちは大きく成長し、達成感と充実感を得ることができました。

ラウンドテーブルの最大の魅力は、思いもよらない出会いと学びにあると思います。今回の４名の生徒は、先輩が見せてくれた姿と活動により参加への興味関心がわき、先輩からのアドバイスや先輩とZoom の練習をしたことにより自信をもって当日を迎えることができました。また当日の交流からは、新たな取り組みのヒントを得て企画するに至り、イベントの実施に向けて日程の調整や協力者の募集、会場の確保や宣伝、当日のステージ運営まで、すべて自分たち自身で行いました。今までと変わらぬ校内での取り組みだけではここまで思いきったことをするのは難しかったと思います。ラウンドテーブル後、「直接会いに行くことが難しい状況にとてもさみしい思いをしていましたが、オンラインでできることが増え、こうして全国の方と顔を合わせ話をすることができるのはとても素晴らしいと思います。」「今回の取り組みを通して、様々な考えをもった人がいることや色々な意見が存在することに気づかされました。自分の中での成長も感じられたし今後の自信も得ることができたので、後輩にもぜひ経験してもらいたいです。」という感想を述べています。これこそラウンドテーブルの最大の魅力、思いもよらない出会いと学びだと感じました。そして私自身も、生徒の新たな一面に出会うことができました。ZONE E に参加し、出会いとつながりの大きな力を感じました。「学びと教えのあたらしいすがたカタチ」を体感する活動に参加させていただけたことを大変ありがたく思います。多くの出会いが新たな一面の発見、新たな学びにつながり、次への契機となることを実感しました。この機会をくださった多くの方々、協力してくださった先生方に感謝の思いでいっぱいです。ありがとうございました。

実践報告への挑戦

東京都立墨東病院　高度救命救急センター看護主任　西野　明子

はじめに、ラウンドテーブルでの実践報告並びにNewsletter への投稿という機会を与えていただきましたことに、深く感謝申し上げます。

私は臨床で看護師をしております。教育の世界とは縁遠いように思えますが、“看護教育”という言葉が存在するように、医療現場では人材育成が必須であり、私も少なからずそれに携わって参りました。日々成人教育の難しさに直面しながら、自らの知識や技術を深めたいと考えていた際、このような機会をいただきました。

実践報告は、私にとって大きな勇気でした。教育の専門家でない私が、それを生業とする皆さまと同じ土俵に立つことの意味を、両者にとっての意義を考えました。私の存在意義について、成人学習者が社会の中で学び続けている姿をお伝えすることが、皆さまにとって何らかの“勇気づけ”になるのではないかとの考えに至り、勇気をもって挑戦させていただきました。

特別講演の中で、兵庫教育大学の山中先生がインターローカリティについてお話をされました。「少しの抽象化により、職場や役割が違っても振り返りを共有し、より良い学びを得ることが出来る」といった趣旨のお話を拝聴し、私自身の存在意義を見出すことができました。

実践報告では「多職種、大歓迎！」と温かく迎えていただきました。私のつたない報告での”少しの抽象化”を的確に拾い上げ、他の方々とも相互理解が深まるようファシリテーションで導いていただき、多くの学びを共有することが出来ました。

印象的だったのは、学校教育において先生方は、子どもたちの思考を豊かにするための働きかけを懸命にされていることでした。成人学習者には、道徳や価値観は既にその人の中にあります。成果として行動変容を常に意識している私にとって“考え方の変容”という言葉には心を揺さぶられました。また行動変容のためには、学習者の中に潜在している豊かな価値観を引き出し、承認し、顕在化することが最も重要であると考えています。私を“引き出す者”と例えるなら、先生方はその“礎を築く者”であり、人が豊かに育つために欠かせない存在であると強く感じました。そして豊かな人と社会を築くためには、両者が重要な存在であり、自身の実践の意義も見出すことが出来ました。

この度の経験で、省察の意義と省察するための言語化の大切さを再認識しました。そして、省察を他者と語り合い、自らの思考や行動を再構築していくことで、何より私自身が癒され、勇気づけられたことは間違いありません。スピードや変化、多様性が求められ、結果が重視されるこの時代において、数値化できない過程を丁寧に支えるこの取り組みは、生涯学習者である私たちにとって、成長の糧になる素晴らしい機構だと感銘を受けました。

最後になりましたが、大変有意義な経験と時間を共有させていただいたことに感謝しております。皆さまのご健康とご活躍を心からお祈り申し上げます。

ラウンドテーブルの醍醐味

信州大学教育学部附属特別支援学校　戸谷　健史

先日のラウンドテーブルでは、地域や学校種を越えて様々な先生方と出会い、実践を語り合うなかでたいへん多くのことを感じ、学ばせていただきました。ありがとうございました。

最後に一日の感想を伝え合うなかで、「ラウンドテーブルに出ると、モチベーションが上がります」と笑顔でご発言いただいた先生がいました。ちょうど私も同じような気持ちでおりましたので、そのお言葉を聞いてさらに嬉しい気持ちになったことを覚えています。まさにこういった、自分に活力を与えてくださる場がラウンドテーブルであると改めて感じました。

このように感じる背景（＝ラウンドテーブルの醍醐味）はどこにあるのか、自分なりに振り返り、表現していきたいと思います。

私は時折、自分の勤務校や生活している地域を離れて、別の地域の学校や文化に触れ、自分の実践を違った角度から見つめ直すことを通して、授業づくりに新たな可能性を見出し、実践することを大切にしてきました。

しかし、新型コロナウイルスの関係や距離的な課題もあり、この１年は県外の先生方と互いの実践を語り合う機会がほとんどとれずにいました。そのため、外の視点から授業づくりに新たな可能性を見出すことに難しさを感じていました。また、この１年の間、地域や学校種の異なる先生方が、どのような思いで子どもと向き合い、どのような実践をされてきたのか、インターネット等では検索することのできない思いや出来事であふれているのではないかとも考えていました。

このような文脈のなかで、今回のラウンドテーブルに参加させていただき、地域や学校種を越えて様々な先生方と語り合い、コロナ禍での各校の実際

の取り組みや先生方の思い、子どもの学びに触れさせていただきました。

実践報告では、学校行事の中止や活動への制限といった、前例のない取り組みが求められているなかにおいても、先生方が子どもたちや保護者、地域の方の思いを丁寧に汲み取りながら、「今できることは何か」ということに真摯に向き合い、新たな授業を創造されていた点が深く印象に残りました。そして、先生方の取り組みがきっかけとなり、子どもたちの思いや行動に具体的な変容が生まれていったこと、主体性が育まれていったことをお聞きし、困難ともいえる状況下においても、私たち教師が前を向いて、勇気をもって挑戦し続けることの大切さを学ばせていただきました。

今回のラウンドテーブルに参加して自分の内におきたことを振り返ると、これまでの私は、別の地域の学校や文化に触れることを通して「授業のアイデア」を得ることに注力してきたこと、今回はそこにとどまらず、「その先生方と子どもたちの思いや営みに触れ、その営みから活力をいただいた」ということがあったように思います。そして、いただいた活力を糧にして、目の前の子どもたちとの授業をより一層充実したものにしていきたいと考えるようになりました。私はこのあたりにラウンドテーブルの醍醐味があるのではないかということを感じています。

今後も、みなさまとの出会いに感謝しながら、自分にはない新たなアイデアに触れたり、各地の先生方や子どもたちの思い、営みに触れたりすることを通して、子どもたちと向き合う活力をいただき、日々の授業づくりに生かしていきたいと思います。今回は、このような貴重な機会をいただきありがとうございました。

公開研究会案内

国立大学法人福井大学教育学部
附属幼稚園

申し込みサイト→

「つながりが育む学びの深まり」

期日：令和３年 11 月　３日（水）公開オンライン研究会　13:00～17:00

福井大学教育学部附属
特別支援学校

申し込みサイト→

「一人一人の学びが深まるカリキュラム・マネジメント」

期日：令和３年１１月１９日（金）公開オンライン研究会　13:30～17:10

東京サテライトラウンドテーブル

申し込みサイト→

「社会とつながる教育・学校」

期日：令和３年 11 月 13 日（土）オンライン開催　10:00～16:30

福井県教育総合研究所

発表申し込みサイト→

「個性を引き出し 学びを楽しむ福井の教育」

期日：令和４年　３月　８日（火）オンライン研究発表会　9:30～16:30

令和4年度学生募集日程
【一般選抜】

説明会
（オンラインでの実施）
日時：第1回 令和3年8月29日(日)
第2回 令和3年12月26日(日)

第1回
（授業研究・教職専門性開発コースのみ）
出願期間　：令和3年9月8日(水)～9月14日(火)
入学試験日：令和3年9月25日(土)

第2回
出願期間　：令和4年1月19日(水)～1月25日(火)
入学試験日：令和4年2月5日(土)

【 編集後記 】今回は今年から就任したスタッフの自己紹介が続きます。院生報告、夏期集中講座での学び、ラウンドの振り返りなど充実な内容となっています。ニュースレターの編集を担当するにあたり、いち早く原稿を読むことができ、よい刺激を受けています。これからも有意義な内容にしていきたいと思っています。（W）

教職大学院 Newsletter　No.152

2021.10.27　公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院　福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp